

特232

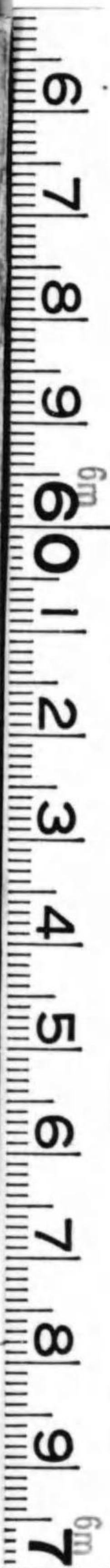
85

廣島文理科大学教授 文学博士 西晋一郎先生講述

教育勅語と國民教育の根本

山口縣教育會

始



特 232
85

廣島文理
大學教授

文學博士 西 晋一郎先生講述



教育勅語と國民教育の根柢

山口縣教育會



發刊に際して

教育勅語渙發四十周年にあたり。聖旨奉戴の感激を新にせんが爲めに去る七月都濃郡教育會の主催で、斯道の權威者廣島文理科大學教授文學博士西晋一郎先生を煩はし、三日間に亘つて記念講演會を開催された。

先生は「教育勅語と國民教育の根本」といふ題下に、多年の蘊蓄を傾け、教育勅語の尊嚴なる所以と、國民教育のよつて立つべき根本とを、東西文化の上より、縦横に究明し、理路整然懇切丁寧に講述せられ、聽講者一同に、明確なる理解と深甚なる感動を與へられた。

教育勅語は天地の大道に則り、造化の化育に賛すべき、我が國民の使命を垂示し給うたもので、古今を通じて謬らざる大典である。併し時代は絶えず變遷し、世相は常に推移するから、その謹解は日に進み月に新に、よく時勢に順應してゆかなくてはならぬ。そして之に基いて。教育

の内容を充實し、延いて國民の生活を純化向上せしめねなければならぬ而して衷心聖旨を信奉するものでも、如上の要求に合する科學的哲學的解説を試みることは容易でない。殊にその要旨を平易卑近に表明することは一層困難である。而も教育に従事するものは、たとへそれが至難の事にもせよ、決して之を回避することの出来ない立場に置かれてゐる。そこで實際教育家は、聖勅に對する自己衷心の信仰を如何に適切に表明し後進者に容易確實に聖旨を拜承せしめて、その向ふべき方針をあやまらぬやうになさしむべきかに、日夜心を苦しめてゐる。

先生今回の講述は實にこの教育者の熱烈に求めて、而も容易に充たし得なかつた要望を、遺憾なく満足せしめられたもので、聽講者の喜を傳へ聞く者は、少しも早く、その講述の内容を知らんことを切望してゐる幸にも當時の講述は専門速記者の速記に留められ、更に先生の校正を仰いだものがあつたので、本會は今回其の讓與を受け、梓に上して、汎く

江湖の教育者並に有志に對し、閲讀の悦を頒つて、その渴望を醫せんとする次第である。

願はくば讀者各位は、本會の意のある所を酌み、十分精讀玩味せられて、教育勅語の理解を高め、更に國民教育の大本を確立して、聖旨に副ひ奉られんことを、聊か本書發行の趣旨を述べて序言に代へる。

昭和五年十二月

山 口 縣 教 育 會

教育勅語と國民教育の根本

廣島文理科大學教授文學博士 西 晋一郎先生講述

教育勅語にある事柄は、教育と道德と國家との事であると思ひます。教育の本は即ち同時に道德の本である。又道德といふものが國家の基礎になつてをります。それで國家道德の根本は即ち教育にある。そういう御趣旨で教育勅語が出たと思ひます。それで教育といふこと、道德と國家と三つの事をお話しますには、即ち三つのもの、關係即ち三者の根本が一つであると云ふ、さういふ趣旨にならうと思ひます。先づこの教育の事柄をお話したいと思ひます。教育の出發點は何であるか、總て物の始めは物の終りでなければならぬ。始めと終りが別であるといふことは、表面では別である様でありまして、結局は皆一つ

になります。我々の出發點は必ずそれが歸着點になり、家から出發しますればつまり我家に歸るまでを終始といひます。總て本當のものは始めあれば終りありその始めと終りが一であります。教育に於てもそうである。且道德に於て最もそうである。始を誤りますと全體を誤る、終を全ふすることが出来ない。それであるから、其の始が何であるかと云ふことを明かにする、それによつてやつて行かねばならぬ。而し教育には勿論教育の事柄があります。總して物の始と云ふものは一つでなければならぬ譯であるから、これは教育の始である、これは道德の始である、又一般人生の始めであると別々にある譯でもなからうと思ひます。仕事をしまするにも手続き技術の上から別でありまして、やはりその根本は同じでなくてはならぬ譯である。それで總て我々の生活の本は何であるか。そうしまするとやはりこれを廣く見て、人間ばかりでなく總ての物の本は何であるか、すべての物の本を我々人間の本と一應區別しなければならぬが終局の所は一つものでなくてはならぬ。それが若し別々のものであるとすると、人間は人間だけで生活してゐるのではない、萬物あつて我々は生活してゐるのだから人間以外のものがなくなれば人間も同時に生存すること

が出来ないので、總てのものは一つでなくてはならぬ。これは聞いた話であります。明治初年のいつ頃でありましたか、いよくこれから積極的に明治維新の仕事をして行かうといふことになり、さて何を以て進んで行くか、根本としてやつて行くか、それについて太政官でありましたか、國中の學者であるとか又名僧智識と云はれた人など國の識者を集めてそして國民に教へて行くところの根本が何であるかと云ふことを諮詢せられた事があるそうであります。一體どうしてやつて行つたらよいかと三條公でありましたかどなたでありましたか先づ尋ねられました。皆一時だまつて居つたが其時獨園和尚が「信を以つて本とする、信は萬事の本で國家は信を以つて本とする、こゝから出發して行かねばならぬ。」こう云ふ事をいはれましてその趣旨を色々そこで論ぜられました、こう云ふ事は實際あつた。これについて又思ひ出すのは、論語の中にあることで皆様も御承知と思ひますが、國を治める政治の根本を弟子が孔子に尋ねた時に、食を足し兵を足し信を教へる、この三つを以つて國を治める、これが政治の要領であると云はれたのであります。食を足すと云ふことは經濟問題で、衣食住に不足のないやうにするので、兵を足すとは防備軍備で外を

防ぎ内を守るのである、信と云ふのは即ち人の道を教へる教育道德の事であり、即ち經濟と軍備と道德教育の三つが國を治めるの條件であります。ところが此の三つが揃へばよいのでありますが、この三つの中で悉くこれが行はれないといふ時は、第一に除けてよいもの差當り後廻しにしてもよいものは何であるかと聞くと、その時は兵を撤する、即ち今日の軍備で、止むを得ない時には先づ軍備の方を後廻しにする、その次には残りの二つのものを全ふすることが出来ない時にはどの方から後廻しにするかと聞きますと、食を撤する經濟問題の方を後廻しにするといはれました。弟子共は何れも大事なものであるが止むを得ない場合、軍備を後廻しにする事は一應聞えてゐるが、其の次には止むを得ずとすれば食ふことを後廻しにするといふことは受取れない。生きてゐて教育道德があるのであつて、其の次は教育道德を後廻しにし、一番缺くことの出来ないものは食であらうと言はれるであらうと期待してゐたかも知れません。二番目に經濟問題を後廻しにするといへばすぐ疑問が起る。食はずに死んでしまつたら教育も何もありません。然るに孔子はそう云つておいてすぐ言葉をついで、古より死あり生あるものは皆死ぬるのである、人間に

信と云ふものがなければ生きて行く事が出来ない。即ち教育道德といふ事がなければ衣食住の道もたゝない。經濟と云ふものは立ちゆくものでない。何と云つても代へる事の出来ない第一のものは信であると云ふのが孔子の教であります。それで國は信を以つて本とする。廣く云へば人間の生活は信を以つて本とする。尙廣く云へば人間のみならず、天地萬物皆信を以つて本とするといつてもよからうと思ふのであります。孔子は勿論のこと獨園和尙であつても、天地萬物信を以つて本とする。哲學めいた事はいはないで、差當り國を治めるにつき大事な事はいはれたのであります。其の道理を推し廣めて云へば、總ての物は信を以つて本とするのであると思ひます。

さて信と云ふことは判つてゐるやうであるが又或る意味ではわからんところもある。總べて最も大事なものは誰でも一應判つてゐるものでありまして、特別の専門的の智識であるとか、或はそう云ふ専門的な技術と云ふものは、それを特に修めた人でないと判らぬのであります。我々の生活の最も根本的のことはこれは誰でも丸きり知らんと云ふことはないのであります。同時に又そう云ふものは徹底して知ると云ふことは難しい。誰でも一應

知つてゐるけれども充分に知ると云ふ事は難しい。専門的智識技術であるとか、そういうものゝ智識に達することは出来る、其の蘊奥を極めることが出来ましても、萬物の根本に至ることは難しい。君子の道は匹夫々々でも關り知ることが出来る。匹夫々々といふのは無教育者であるといふのであります。君子の道は誰でも關り知ることが出来る。無教育者は或る所迄は知つてゐるが、そう云ふものゝ至れる所は之を聖人でも知ることが出来ない、根本を極める事は出来ないのであります。今信と云へば誰でも知つてをります。然し根本に達することは難しい事である、此の信が國の本で又人間の生活の本であるならば、教育も勿論之が本でなければならぬ。學問も之が本でなくてはならぬ。さて信と云ふことは、又誠と云ふ事で、言行一致であります。それで今日の學問の上でいへば、學問と云ふものは、物の真相を掴へる、確實の所を捉へやうと云ふものが學問である。そのために充分の證據を求むべきで決してよい加減の思ひ付き只個人的の意見と云ふものになつてはいけなない一般的確實な證據を求めなくてはならぬ。それで普通の知識よりも學理學術上の知識のよいといふのはこゝにある。こゝに何か或る思想といふものがあつても、一たいそれはどう

いふ證據をもつてゐるか、如何なる證據があるか、其の證據をつき止めねばならぬ。何か論證がないと思つてはない。こゝにいふ様に確實信實といふことを掴へると云ふことであります。所がそういふものは。實は手近な所にあるけれども、兎角其の手近なものを忘れて、何故かこれを遠きに求める。ごく低いところにあるのであるが、それを其所に求めずこれを高いところに求める。そうすると却つて求める事が出来ない、それを掴へることが出来ない、それが一たい我々の有様である。學問も我々は西洋の學問といふものを非常に尊重してやつてゐる。今日學校で教へます所の餘程の部分は、西洋から入つた學問であります。學問に於ては、實際と云ふものを研究する學問と、道理といふものを研究する學問と、さういふ二つの方面があると云つてもよからう。その實地の經驗を本とする學問を科學といひます。畢竟我々の感覺が本で、目で見耳で聞き手で觸れる、其が普通經驗と云ふ事になるが其が先づ一番基礎であつて、その上にいろいろの方法を用ひ、其の上に人間の考へ思想と云ふものが起つて、それが經驗と云ふことになるのであります。何れにしても經驗の土臺は、見たり聞いたり觸れたり本である。今日確實な學問であると云ふと、誰でも

すぐ科學が最も確實なものであるとし、確實な知識のことを科學的知識といつて段々教育
 道徳國家の法律の事でも科學的に研究したものでなくてはいけない、科學的方法にやらぬ
 ものは確實なものでない、さういふ風に科學といふものを確なものにしてゐる。然し科學
 と云ふものは所謂自然科學と云ふものが科學の本場であります。つまり物理學、化學であ
 るとか、生物學であるとか、さういふものが自然科學で、これが科學の本場であります。
 さういふものゝ研究に社會であるとか道徳とかをもつて行つて、それを科學的に取扱ふの
 である。科學と云ふものは自然の科學でありますから、さういふものは確實なものであつ
 て、實驗觀察に基いてゐて只の空論でない。哲學といふやうなものは只思想だけで隨分空
 論もあるが、物理學、化學、博物學等は實際の研究觀察から來るから確かなものである。
 社會の事も教育の事も實驗觀察からやつて行くとそれが經驗的學問であつて、道理といふ
 事を説くのではない。ところが其の經驗は實驗觀察であつて、我々は目で見、手で觸れ、
 耳で聞いたその上に數理を應用する論理をもつて來る。それで科學を作り上げるのであり
 ますから、只論理や數理の學問ではない。一番土臺のものは實驗觀察といふ目で見、耳で

聞く、これが本である。ところが目で見耳で聞く所謂感覺と云ふものが確かである證據が
 何所にあるか。何か我々が一つの思想を持ち出すときに道徳上乃至教育上の議論であつて
 も、その確實性は何處にあるか、どういふ根據があるかすぐ突込んで行くのであります。
 ところが實驗觀察といふ事は、目で見たり耳で聞いたりするが、感覺といふものが確かだ
 ある根據は何所にあるかといへば感覺以外に何も無い。さう見たから確である、さう聞い
 たから確であるといふだけで、自分以外に別に確實性は持つてをらない、つまり感覺を信
 じてゐると云ふ外はない。見たから見た通り、それに間違はない、聞いたことは聞いた通
 り間違はないと自分で信じてゐる。而し信じてゐると云ふ風な信ずるといふ心持は出てを
 らない。まだ信ずるとか信念とかさういふ思想の起つてこない以前に、自分の目を信じ自分
 の耳を信じてゐる。我々の目が見せてくれるものは間違はないといふさういふ證據はな
 い。耳が聞かしてくれたものは間違ないと云つても證據は別にない。只耳を信ずる外はな
 い。證據を信じる外はない。是を信じないと云ふことになれば我々は生きて行くことは出
 來ない。目で見たが實際はどうであらうか、耳に聞いたが實際はどうであらうか、證據を

擧げて見ねばならぬと云ふことになる。手も足も出ない。併し誰もそう云ふ感覺の証據を求め、るものではなくそのまゝ信ずると云ふ。知らずに信じてゐるのであるから、これを無心の信といふ。即ち何の心なしに信ずる、これが我々の生活の本になつてゐるのであります。之は最初から問題になつて居らん。そう云ふことを尋ねると却つて可笑しく感ずるけれども一應吟味しなければならぬ。經驗の學問は確實である科學程確かなものはない、こゝういふ考へで居つたのであります。それを疑ひ出した學者が出て來た。それは近い事ではなく西洋の近世の學問の始め十七世紀に段々經驗の學問が發達し、科學が發達して來た。その時フランスのデカルトといふ學者が懷疑といひまして經驗といふものを疑ひ出したのであります。一體感覺といふものを信じてゐるが物理學は何であるか、これ程よい物はないと信じてゐるが、感覺が確であるといふことが何處にあるか。此所に確かな証據がないとして見ると、どうしてもそれを疑ふことの出來ない確かな証據を擱へなくては、學問の出發點が決まらない、學問の基礎が決まらない、感覺は基礎としては確かなものではない、總べて物を疑へるだけ疑つてどうしても疑ふことの出來ないものを擱へなくてはなら

ぬと言ふのがデカルトの學問の出發點であります。それでデカルトは總て今まで信じてゐたものを一應皆捨て、しまつた。今までその通りに受取つてゐたものを捨て、しまつて、そして新たに確實なものを得ようと、その方法は一切を疑ひ、そして疑ふべからざるものは何であるか、それをしきりに求めまして、さて一生懸命に疑ふべからざるものは何であるか探ね、して不圖思ひ當つた。それは外でもない。この疑ふべからざるものは何であるか一生懸命に求めてゐるところの深く疑つてゐることが、此が疑ふべからざるものである。疑つてゐるといふことを知つてゐれば始めから問題はない。疑ひ探ねて求めてゐるといふ此はたしかに疑ふべからざるものである。即ち自分といふものが居ることは確かな自分が居らねば疑ふものはないので、確實なものを求めるはそのものがゐるに相違ない。それで有名な「我疑ふ故に我あり」唯形式論理ではないのであります。實際其の苦心の結果此處に至つたといふのは畢竟何であるか、眞劍になつたからであります。確かなものを擱へなくてはならぬ、それは何物であらうかと一生懸命になつたのは嘘でも何でもない湧いたものでもない。これは確かなもので、こう氣がついたところを見れば疑ふべか

らざるものは何であるか、即ち自分である。自分が生きて居らねば疑ふこともない。さてこれから顧みて今迄疑つたものを見ますと、それが確かなものになる。唯の感覚であつたなれば我々は夢の中にも感覚があると云つてよい、夢の中にも色々なものを見たり色々な聲を聞く、覺めて見るとそれは實際の事に當つて居らぬが夢の中に感覚といふものは有つたに相違ない。それが世の中の事實になつてゐない。實際此處に居ない人と話をした、此處にない景色を見た。感覚だけを本にしてゐると夢と事實との區別がつかない。夢にも感覚がある、今デカルトが自己といふものが確實であるといふことを見たといふのは、つまり自分が畢竟確實なものになつたといふ事でありませう。自分が一生懸命になつて、其處で確實といふは何であるか確實なものになるといふことである。自分が眞劍になるといふことが疑ふべからざることである。從來確實なものを他に求めてゐた、何處か確實なものがありはしないかと外ばかりに目をむけてゐたが、豈圖らんや確實なものは外にあるものではない、自分自身にある。然るに今迄の自分といふものが眞の自分でなかつた、一心不亂にならなかつたのであります。此所から翻つて見ますると別に感覺到違はない、矢張り柳

は緑花は紅、赤いものは赤い青いものは青い。最も自己が確實であれば感覚が確實である。自分が確かに見た確かに聞いた自分自身が確かであれば見たことが確かで聞いたことも確かである。自分がどうかしてゐれば、何を見たか何を聞いたか、昨日のことは夢のことで、況んや年月を経た過去のことは茫漠としてあるかないか解らない。千年の暮しをしても何の役にも立たない。以前美味しいものを食つても、今日美味しいものでもない。自分が確かであるから其處で畢竟自分の耳目を信ずるといふことになる。自分自身を信じてゐるか、自分が目を開いて確かに見たからは是は間違はない。自分で確かに手で觸れたから間違ひない。そういふ自分自身を信ずると云ふことが元來本になつてゐる。其處で目を信じ耳を信じて實驗觀察が確かと云ふことになつるので、それが確かであるといふことに先立つて、自分自身が確かである、自分が生きてゐる其の自己といふものが總べて本である。さてそれが只自然のまゝで確かなものであるのではなくして、自分で確かなものにならなくてはならぬ。努力してならなければならぬ。デカルトはこういふ論法でいつたのでないが。趣意は畢竟これに外ならないのであります。それでデカルトの學問は實驗觀察が本

で、自然を本とし内面を本とする科學は外面が確かであるに先立つて、内面自身が確かであれば一向實驗觀察は土臺のないものになつてしまふ。自然科學は其の根底を疑つて失はねばならぬ。物理學も生理學も一生懸命に研究してゐる自身といふものを、信ずるとなしに信じてゐる、それは問題でない。それで信じなければ自分の觀察が夢のやうなものになつて來る、こゝに戻つてこなければならぬ。

さて自分が生きるといふことは體が生きてゐるといふことではない。それは只外面的に生きてゐること、自分の目で身を見、自分の手でつめて見る、矢張り感覺によつて見る。生きるといふことは一つの感覺である。我々は身體がよいときに健康の感覺を持ち、腹の具合の悪い時には又一種の感を持つ。身體を通じていへば身體を信じてゐるがこれ又間接のもので、本當の直接のものは心自身である。これは身體に備はつてゐる機關、耳目口と云ふもの、媒介によらない。我々の心のことは自分で直接知つてゐる。外のものは目によらねば見えない、耳に寄らねば聞えない。若し目がつぶれた時には外のものを見ることが出來ない、どんな色であるといふことが出來ない。耳がつぶれたらどういふ聲もどう

いふ立派な音樂でも分らない。目が見えなくなつても耳が聞えなくなつても、そういふ道具がなくなつても、自分でかういふことを考へてゐる、自分がかういふ感を持つてゐるといふことは、紹介なしに仲介なしに直ぐに信じてゐる。そう感ずるそう知るそう考へてゐると、自分が自分を知るのであるから、これ程確實なものはない。確實眞實といふものはなんであるか、自分の心で自分の心を知ることである。我々は子を持つてゐれば子を愛する。自宅に歸つて見れば自分の子がゐる、話し聲は耳で聞くのである。やはり耳目を通じて自分の子であると承知してゐるのであるがそれに對し一つの感を持つ、可愛いといふ感を持つ、その子供を可愛がるといふことと、自分が可愛いといふ心を持つてゐるといふこと此方が確かである。子供も矢張り目で見耳で聞き自分の子供であるといふことを知つてゐる。自分が可愛いといふ心を持つてゐることは自分で知つてゐる。キリスト教では兄弟即ち人間同志互に愛さねばならぬといふことが神の教へである。その兄弟を愛するその兄弟を知つてゐるよりも、その兄弟を愛するといふ方を我々は確かに知つてゐる。それで眞といふ眞實、確實、誠、少しの偽もないその通りといふことは、畢竟我が中にある

ことを我々が知つてゐる。人間の良心といふことを言ひますが、良心といふことはつまり自分はこう考へてゐると、自分が知つてゐることである。人を欺いても自分では知てゐる。人にあゝいつても自分にはそう考へてゐない。何時々々はこうすると約束してもそうする考へは自分は持つてをらんといふ事は、自分では確かに承知してゐるのである。表面何處まで良いことをしても暗いことをしても其の真相といふことは、自分でちやんと知つてゐる。これだけは欺くことが出来ない、確かなものである。所謂悪臭を憎み好色を好んで美しい色を美しく感ずる。この自分の内面といふもの以外には出てゐない、これが信である、結局信といふことは心自身である。信といふことはつまり正直といふことであらうと思ひます。神は正直の頭に宿るとか、或は我國で真といふことがあるが、信は誠即ち正直、何が正直であるといつても、心程正直なものはない、ちやんと自分で知つてゐるのである、間髪を入れないといふことは此の事である。ところが此の衣食住の事も押つめて其の真相を極めると、信といふことになる。然し普通そういふことから教へてゆくことは出来ない。例へば今話してゐる様なことを子供に教へ様としても教へることは出来ない。段々も

のを考へる様になつて其の先々と根柢を究めるのであるが斯ういふことを幼少の者に教へても分りません。小學校に入つた子供でも分らない。斯ういふことを以つてすぐ教育の出發點にすることは出来ない。實際信が本であるが、どうしたら子供が信に入ることが出来るか、斯ういふ哲學めいたことを子供に説く譯にゆかない。感覺といふものは無心の信である。無心の信といふは本能の事である、であるからして本能に依頼するのだといふ考はない、只本能である。寒ければ暖いところを求める。腹が減れば子供は乳を求め渴けば水を求める。水を見て水と知る、既に本能の感覺で我々は生きてゐる。そこで本能の感覺といふことは、これを信受の器といつてよからう。信受する器である。信受する道具になつてゐるのである。そうすると人間ばかりでなく、人間以外の物が矢張り本能感覺を持つてゐる、鳥獸には鳥獸相應の機官があり、耳、目、口、鼻があつて其の働きで食ふべきものを食ひその働きで生活してゆく。草木も矢張りそうである。草木の感覺といふものははつきしてゐませんが、矢張り生理機官は備つて居ります。それが周圍のものと交通することを信受と云つてよいと思ひます。人間の心ある立場から言へば信じて受けるのである。人間

の言葉に翻譯すれば草木も信受してゐる、根は段々地中の方にむかつてゆく、そして地中といふものに信受して枝葉は段々空中に向つて光のある方に向つて行く。妙なものではつきりした感覺はないが生きてゐる。光の方に向つて花が開きそして空中から養分をとつてゐる。即ち周圍のものを信じて之を受取つてゐる。之は即ち周圍のものと交通するのである。其の周圍のものと交通するにつき、交通の機關が備つてゐて、自然に入れ受くべきものを入れ、排泄すべきものを排泄する。鳥獸の如きも毒になるものは食べない、天然自然の不思議な働をもつて居ります。其の信受の道具がない即ち本能がないと生存することは出来ない。周圍のものと交渉を杜絶しますと自分が生きて行くことが出来ない。草木鳥獸すべてのものが生きてゐるといふことは、即ちその周圍と交通することである。交通を杜絶してしまつては生きてゐることは出来ない。體の組織は信受の道具交通の道具の働きで、外のを内に入れる、内のものを外に吐き出す、體が一つの交通の器である。動植物も即ちその働をして居ります。それが本能的生理的働きである、即ち信受である。然しそふいふことは誰も知らない、草木鳥獸の知らないのは勿論のこと人間の子供も知らない、

子供が知らないばかりでなく科學者が知らなかつた。無我無心で見た事聞いた事が確かといふことを論証するに考へ及ばなかつた。それは初めから假定してゐた、科學者といふものは確かでないものは假定だとなすのであります。感覺といふ事が確かであるといふのは矢張り假定である。唯無心に信ずるといふ事で生活が出来るのみならず、學問も一切そふいふ事でやつてゐたのであります。そうするとそふ云ふものは萬物を信じて受ける所謂信がなければ生きられない。人間は食物がなければ生きられないがその食らふといふ事が即ち信である。それで信がなければ人間は生きられないと云ふのである。物を食べる道具がある、物を食べる慾がある、それで物を食べてゐる人間が米を食ふと云ふ事は米は實際どんなものであらうかと、一々學問的に研究して、米にはこふいふ養分がある、これは食ふてよろしい、こふいふことで米を食ふことになつたのではない。人間は水を飲んでゐるが、水は飲んでよろしいと、學理的研究をしてから水を飲む様になつたものではない。これは生物の本能で鳥獸草木も自分に適するものをとつて體を養ふてゐる。人間も體を養ふことは本能的に天の恵みで、日本人は米を食ふ様になり、一般に水を飲み空氣を呼吸する事

は生理作用であります。皆これは信じてゐる、信賴の心を持たずして信賴してゐるのである。それで生きてゐるに信がなければ人間は生きられない。草木鳥獸も生きることとは出来ない。だから生きるといふ事と信といふ事は同じと云はねばならぬ。只それを知ると知らんとの相違がある。その知ると知らんとが所謂人畜の分れる所で、人間が萬物の靈であるといふことは、自己を知り信によつて生きてゐるといふ信の信たる事に氣がつく所にある。人間は始めは知らない、子供は殊に知識欲模倣性が強いのであります。知識欲、これで色々の事を知ります。知識欲と云ふものは好奇心が伴ひ何か音がすればすぐ耳をそばだてる、何か集つてゐればすぐ走つて行く。大人も同様であるが大人は子供程に強くない、子供程好奇心の強いものはない、何かにつけて耳をそば立て目を向けて物を見よう聞こう知らう／＼としてゐる。知識欲が鋭敏であるから特に心が發達するのであります。模倣性があるからすぐ真似をする、之も本能的で、殆んど生理的に向ふが手を動かせばこちらも動かす、それによつて又段々成長發達して行く。例へば言語の如きも模倣で感覺と云ふものが之を導き、自然に真似てものを言ふ様になるのであります。さういふ感覺・知識慾・模

倣といふやうなものがあつてそれで成長發達してゆく。そこで教育の問題になると、此の知識慾が教育の出發點である、模倣性が教育の出發點であると、さういふ考が出て來るのであります。それが間違つた教育の出發點であります。斯ふ云ふ風に考へるから、教育をしましても其の結果はどうなるかといへば、只教育に偏する、色々の知識がついて人間が賢くなるが、然し人柄が良くなるらない。知育は出來たが徳育がない、さういふ結果になるのは、元々徳育の外に知育、知育の外に徳育といふものが別々にあると考へるからであります。知育即徳育でなければならぬ、それが何故ぞうならないかと云へば、知識慾・模倣性が教育の原理である様に思つて、其の方針でやつて、興味を満足さして行くからである、興味といふのは知識慾である。總て興味は知らう／＼とするので、興味より知識といふことを除いて見ますと、興味と云ふ事は何の内容もない、總て物に興味をもち即ちものを自分で知らうと云ふ事でありませう。子供の知識慾・興味・模倣性そのものを教育の根本原理にしてそれで育てて行く、さう云ふやり方は、其の信の信たる事を知らないと云ふものである。成程それは一應尤であります、知識慾や模倣性がなければ子供は發達しない、

然し知識慾・模倣性の根本を考へねばならぬ、教へるものは其の根本を知つて其の根本を標準にしてそして知識慾・模倣性を導いて行かねばならぬ。恰度食慾があつてそれで我々は體を養つてゐる様なものである。食慾は天然自然にあるから之を道理で拵へるわけには行かない、道理で食慾を起こさせるわけには行かない。病氣になれば食慾がなくなる、そうすると物を食べないから体が衰へる、食べなくてはならぬ、さういふ道理はいくら知つてゐても如何ともすることが出来ない、食慾といふものは人間が作るわけには行かない、自然に食慾があつてそれで物を食べて體を養つてゐる。自然に知識慾・模倣性で色々なことを子供が知り色々の事を做ふので成長發達しますけれども食慾だけで人間が健康な體にはなれない。例へば子供を育てるにしても子供に食慾があつて始めて育つと同時に食慾を指導する親がゐるのであります。目の前に置いて置けば子供は塵でも何でも口に入れる、よろしくないものをとつて食べる、悪くすれば一度で病氣になり一命を失ふ。食慾と云ふものは盲目的のものである、食慾を導くべき道理を知らないもの即ち人間以下のものは完全に本能に従つてゐるのである。人間は一方からいへば長所があり一方からいへば短所がある。人間以下の動物

(人間以外のものを皆物といつた、さういふ人間以外の萬物)と云ふものは、天機に動くと言つたが今の言葉では全く本能的に動いてゐるといふことになる。自然に毒になるものは嗅ふてもなめてもそれを食べない。然るに人間はそれを取り違へる。人間は道理があつて子供等を指導する親があるが、子供を理解してゐない親であるといくら食べても之を見てゐる。それであるからして子供の腹によくない物を食べて誤る事が多い。又大人もさうである。大人はその點を知つてゐるが、食慾あるに任せて暴飲暴食をしないまでも、矢張り體のためによくないものをたべる。大體我々の病氣はさう云ふ食慾から起る。食慾といふもので生命を養ふのであるけれども、又食慾といふもので生命を失ふ。つまり食べないで餓死する者は少いが。食べすぎて病氣を起して死ぬるものが多いのであります。慾といふものはそれに任せておくと自分自身に矛盾する性質をもつてゐる。盲目的といふもそれである。自殺的のものをもつてゐる、己れ自身を打ち壞す性質をもつてゐる。食慾に任せると體が衰へる、物が食べられない様になる。其外人間の慾はさういふ性質を以つてゐる、男女の慾にしても、それで人間が子孫を残し人類が存続するのであります共、又此の慾

に依つて人間は自分の胤を亡ぼす様な事がある。自分の體を傷づける、又此の慾によつて世の中の秩序を攪乱する。色々の罪惡の餘程の部分けさういふ慾から起るのであります、けれどもその慾があればこそ子々孫々民族と云ふものが繼續するのであります。斯く最も大事なことが最も毒になる、その大事な物が人類存續の藥である、さういふ性質をもつてゐる。其の藥である所は畢竟信である、その藥が信であることを知ると本能を指導する、生理衛生の道が發達することにより、こいふものは食べてよくない、これがよい、之丈けの分量でやつて行かねばならぬと云ふ風になる。又男女の道もこゝに自覺が起つて婚姻の道德が起つて来る、それで男女の慾を満しながら男女の慾を傷けない、さういう事が人間に起つて来る、それと同じ譯である。知識慾も只知識慾に任せて置けば何事でも知るのであります。併し子供には知らせて良い事と知らせて悪い事がある。又見せてはいけないものや聞かせてならない事が澤山あるに。然る子供は知識慾から何んでも聞こうとし何んでも見ようとするものである。例へば書物等でありまして其の年齢に相應した書物を讀ませないと、子供の爲にならないものが澤山ある。どんな書物でも讀む丈は讀みます、併し齡こゝろに應じて撰

擇しないと得るところは害ばかりである、則ち子供が悪い事を知り早熟になる、早熟となるばかりでなく色々の害を受ける。知識慾に任せてはいけない、指導原理がなくてはならぬ。子供は模倣性で何人でも真似る。悪友と交れば悪くなり、良い友と交れば良くなる。模倣性自身は良い事悪い事の區別を知らない。唯真似ることが模倣性であるから、良い事も真似るが悪い事も真似る、さうすると模倣性に反する成長發達は順調に行かない、模倣性といふことを教育の原理にしないで、其の上に實地に指導して行くものをもつて、誰某と遊ぶことは出来ない、誰某と交際せねばならぬと導いて行かねばならぬ。然し自然主義であるとか本能主義であるとかいふものはさういふものを認めない。何んでも本能通りに働くのが良いといふのである。出来るだけ興味をそゝり、何んでも充分食べるが良い、食べられるだけ食べるが良いといふのであつて、知識慾といふ働きて、それでやり損ひがないと思ふのである。食へ過ぎることはやがて我々人間に禍し、病氣の大原因であるといふことに氣がつかない。或る醫者の説によると何でも食ふがよいといふのでありますが、近來はさういふ事を云はなくなつた。それと同様に何でも興味を澤山持つがよい、知識慾が教育の原理社會の原理

であると、そういう事を立派な學説として述べて居るものがある。なる程そういうものがなければ成長發達しない。食慾がなければ體はもてないけれども、指導して行くものがないければ人生の慾望といふものは本來の目的を達する事が出来ない。教育の出發點は知識慾や模倣性にあるのでなく、それを指導して行く所が教育の出發點でなければならぬ。指導するものがなくてはならぬ。勿論そういうものを豫想せねばならぬ。指導するものは何であるか、食慾だけで食慾の道理は出てこない、食慾は體を養ふ所以のものである。道理を知り其の道理に従つて食慾を指導する、是以外から出て來ない。本能慾望の眞の意義を知る事により、道理が出て來るのであつて、慾があるのみならず、慾の起る所以を知らねばならぬ慾はその根本があるのである。これが所謂指導原理で、其の基はこゝから出てこないければならぬ。知識慾・模倣性以外に指導原理を求めることは出来ない。元來人間には知識慾が多いのである、それはどう云ふ譯か必ず深い譯がなくてはならぬ。その譯を知つたものが其の根本を掴へてそれによつて導いて行く、知識慾の根本に反省して、そこから指導原理を得てこねばならぬ。模倣性に於ても同様である。その本來に省み自分の本來を

知る、それが無心の信から心ある信となる道である。知らずに信じてゐる、その信ずることを自覺する本能がなくてはならぬが、尙一步進めて本能の據つて出ることを知つて、それを導く、それが教育の本でなくてはならぬ。

さてそういう本は何であるか。すべての慾望知識慾といふもの、根本は何であるか、それが即ち信である。唯本能的に自分に知らずに信じてゐる、自分の目や耳に信賴し、感覺本能に信賴してをるのであつて、信賴といふ心持がないのであります。それがこの信ずる心が初めて出て來る、その心持の出て來るのが即ち無心の信を轉じて有信の信となすのである。その本能感覺の本來に戻つて來る、人間のみならず萬物は自分の構造機能、體の構造機能心の構造機能そのものに只信賴してをる、それで信賴と云ふ心持がないのである。その心持が出て來る、これが本能感覺模倣性を指導する原理の出づる所であります。

其の信賴は人間の何處から起るか、子供の親に對する信賴、そこに始めて人間の信賴といふ事が出て來る。生れると共に我々の體は信受に據つて信賴に依つて成り立つてゐるのであります。その心持がまだ現はれない、その始めて現れるのが子供の親に對する信賴で

あります。其處で教育の出發點は即ちその親に對する子供の心である。それを古來教への由つて生ずる所といつた。知識慾模倣性が教の由つて生ずる所であるとする。西洋の教育説にはそれがある。日本でもさういふ風に考へてやつて居る。知識慾をそゝり興味を動かす教育のみならず、社會に於ても模倣性が社會の原理であると、さういふ風に云つてゐる西洋の學者もある。我々の方ではさういふ事が教育の基であると云つて居らない。由つて生ずる所の即ち教の由來、是が出發點である。それ孝は教の由つて生ずる所といふが、孝といふ事は色々の内容があるけれども、親に對する子供の信頼、信頼すれば信頼する者には從順である、從順といふことに始めて意味がある。唯これを教へられてそれに從ふ方が利であると考へて、利害の念に訴へて從ふと云ふやうなことでであると眞の從順とは云はれない。何物かを仲介としてその手段としての從順といふのならば、それは決して從順ではない。我々が心から此に信頼してゐると云ふことになる、その人の云ふ事に眞實從順になります。何等の束縛なくしてそれに從ふ、それで初めて從順といふことも本當のものになつて來るのである。信頼といふことを又考へて見ますと、信頼といふ事はつまり宗教

では信仰といひます。我々が信頼してゐることは何となく仰ぐ所がある。即ち感情の言葉で云へば敬愛であります。自然に敬ふところがあります。敬ひ畏れると云ふばかりでなく、頼りあり信頼するのであるからなつかしみ信愛する。親しく愛すると云ふ意味があるから敬して之を愛する、さういふ心持が即ち信頼、子供の父母に對する心が即ち敬愛である。そこでさういふものを良知と云ふ、所謂赤子の心、孟子に所謂大人は赤子の心を失はずで大人物は一生涯赤子の心即ち赤ん坊の心を失はないと云ふのは、赤子は極素直に親に信頼し親を敬愛して居ります。その心を終始失はないものが即ち大人物であります。子供には良い所と悪い所があります。悉く良い譯ではない、その赤子の心と云ふのは、さう云ふ良いところを指すのであります。これは天然自然のことで孟子に「孩提の童もその親を愛することを知らざることなし、その長ずるに及びてその兄を敬することを知らざることなし」といふ文句がある。孩はこゝろ、提は抱へると云ふ意味、孩提の童は即ち一、二才の小兒である。その子供でも母親の足音は知つてゐる。稍長ずるに及びてその兄を敬するを知らざることはない、自然に自分の兄さんを敬ふ。親は之を愛し兄は是を敬ふ、是は區

別したのではない、親を敬愛し兄を敬愛する。兄を敬愛する許りでなく、親を愛するといふのは、例へば子供は自分の家に飼ふてゐる猫を愛する、犬を愛する、非常に可愛がるがそれに對する心と親に對する心と同じでない。唯愛するといふことなれば、親に對する感情も犬猫に對する感情と變りがないけれども、信愛するに共に敬ふ氣がある。信賴すると云ふことは此の事である。犬猫を仰ぐと云ふ意味はない、依りすがの意味はない。そこで孔子も敬せざれば何を以て分たんと云はれて居るが、敬すると云ふ氣持は教育で出來たのではない、即ち良知で教へずとも知るのである。親を信賴すると云ふことは、教へる事の出來る豫想條件である。先づ親を信賴し親を敬愛しなければならぬ。親が子を教へる事が出來ないならば、抑々人間の教育と云ふ事が始まらないのであります。一番最初の教育者は無論親であります。そこで敬愛心が教へに依つて生ずるのではない、教の由つて生ずる處が敬愛心であります。始めが終りであるから、信賴敬愛する心が出發點であると同時に、教育の一番終りも親を信愛敬愛する、友人を信愛する、敬愛する、國に對しては國の法律を敬愛する、國の君主を敬愛する、總て眞理にて敬愛の念を持つ。人間生活の初めは終局

である。その終るところはその始であります。畢竟教へるところは、無いものをつぎ足すのでなく、その有る所を本として、それを益々廣めてゆき之を養ふて行くことであります。子供は信愛敬愛してをると云ふ事を考へてをらないけれども、敬愛の心が起つてくる、親を敬愛し信賴してをる。これが教育の根本でなくてはならぬ。出發點でなくてはならぬ。そうしますると親の教へによつて智識慾を働かせる。かういふ事をやるがよい、かういふことを真似るが良いと云はれる所に模倣をもて行く、如何にも模倣性智識慾を己のまゝに働すのでは教育にならない、親の食べさせるものを食べる、無暗に自分の食慾に任せない。人間の生活の總ては一切それである。或は男女の慾、愛國慾、財産慾、名譽慾や人間の射倂性も一種の愛慾である。これ等のものが人間生活の内容であります、それがそのまゝに働いたのでは、そのものを傷けると云うことになる。勿論慾がなければ世間はないが、財慾のみでは物質の奴隷となる。富は大事なものである。それなくては人間の生活は成り立たない。大事なものを大事なものたらしめるその意義を完うする、其處に根本がなくてはならぬ。そこで始めて法則と云ふものが人間に出て來るのである。法則といふ

ものは天然自然にあるが、それが我々に取つては法則にならない。智識慾一方で進んでゆくと法則を知つても、その法則といふものは我々の利害の念に逆ふと法則にならないのである。總て則は我々は之に従はねばならぬ、遵奉しなければならぬ。法則といふものは是れを敬ふと云ふところがなければならぬ、完全に云ふなれば敬愛するのであります。さもなければ法則と云ふものを利用することになるのである。科學と云ふものは、智識慾と云ふものから出發すると、科學的に研究したものは色々の法則即ち物理學の法則、生物の法則であり、其の外心理學でもそうである。學問はいろ／＼の法則を研究するものである。然しそれで知つたところの法則とは何んであるか、其の法則を用いて色々の物質文明を起す。電燈をつけたり汽車を走らせたり色々の事をやる。或は山・畑など農事の改良をするにも總ての法則を知りませんと我々が天然を利用することが出来ない。勿論天然を利用してをるが利用と云ふ考へばかりでは余程横柄な考へと云はねばならぬ。天然の恩恵を受けてをると云ふ感じもなくはならぬ。そうなると天然の法則と云ふものも、遵奉すると云ふことによつて、天然の恩恵を受ける。こう云ふ心持になるに、余程人間らしくなる。そ

う云ふ心になれば科學で研究した法則と云ふものが、やはり人間の遵奉すべき法則と云ふ意義を持つてをる。西洋の學術でもごく近代のものと、或は中世古代のものと、余程性質が變つてくる。法則と云ふ事も變つて來てをる今日は知識慾と云ふことを本とするから、そこで知識は力なりと云ふ様な考へが出てくる。我々が物を知ることが、物を支配する譯である。それは如何にもそうであり、一面を語つてをる。それ丈けなら、人間と萬物の關係に於て人間は只萬物を支配すると云ふことになるが、人間は萬物を友とするのみならず萬物の恩澤を受けてをるのである。草木鳥獸なくば、我々が生活して行く事が出来ない。この心なくして只自然を征服する考へ許りあるからして、人間同志の生存競争で、知識のあるものは、ないものを征服する。優勝劣敗でやつて行く。人間に對しては、敬愛であるとか信愛であるとかの心をもつが、人間以外のものに對しては、一切そう云ふものをもたないと云ふ事は、本當はあり得べからざることである。人間を懷しむと云ふなれば、天然を信愛する心もあり、人間に對し慈悲心あるなれば、萬物に對しても相當の慈悲心もある譯であります。人間の敬愛心をとつてしまつて只知識慾丈け働いてをつたものは、道德教

育の役に立たない。只人間が生きてゆくに必要な色々の武器を授ける、天然を征服し、進んでは自分以外の人間をも征服し、自分が廣大な生活を營む、そふういふ武器を授けるのがつまり學校に行く目的であるとして、教育が若し生存競争の利を授ける場所であるとするなれば、教育が盛んになればなんとなく世の中は險惡になる。それでなくても生存競争してゐる。そこにもつていつて専門の知識學術をもつてゐるとそれ丈け人に勝れてゐるものが、それをもたないものに打ち勝つて、自分丈け都合のよい生活をする様になる傾がある、現在もなしとは云はれない。そんな教育が盛んであれば盛んである程、何か世の中がけわしい、これは知識一方で行こうとするからである。

併し知識と云ふものが悪いのではない、知識に對するこちらの態度が間違つてゐる。知識は眞理を示すものであります。眞理程尊いものはない。併し眞理に對する感じは冷いのであります。物の眞相を掴へてそこで物を支配して行くと云ふ態度ではいけない。然し乍ら其の知識がなければ、徳育がないのであります。本當の所を人間は知らなくてはならぬ。社會なれば社會の眞相を知らねばならぬ。人間の心なら心の眞相を知らねばならぬ。

人間の心なら心の眞相に徹して掴へなくてはならぬ、子供の教育なら子供の眞相を知らなくてはならぬ。間違つた政治家は社會の勢を觀てとつて、其の勢を利用して自分の權勢を握らうとする。同じ知識を持つた政治家でも、良い心の者は世の中の勢を察して、それを善導する。勢に従つて國民の爲になる様に考へてゆく。知識も使ひ様によつて色々用をなすが、今教育に依つて教へる所は良知良能である。

先刻申上げたデカルトの總てを疑つて遂に自身自力を信ずるに到つたのはなる程信と云ふ事は心で心を知るので信である。心程正直なものはない。然しそう云ふことを以つて子供を教へる譯にゆかない、子供にはそう云ふ事は分りません。それに相違ないが教への由來する所はそれとは違ひまして、自然に親を信ずるといふ信頼する心である。これは哲學者が物を深く考へて至つたものでない。又特に信仰を用ひまして子供に色々宗教を信じさせる譯にゆかない。宗教は世の中の様々の事を手にして、何か信仰を持たなくてはならぬ。事になつて來てからの事である。佛教や耶蘇教にある教義を與へて教へる譯にゆかない。共通の心日本許りでなく、西洋人も矢張り同じ心で子供が親を信頼する心を本とする、それ

で我が國でもペスタロッチの教育とい事が、大分八釜しく宣傳せられて居るが、ペスタロッチは如何にも大教育家である。ペスタロッチの言葉に、母を通じて神を知ると云ふことが出て居ります。子供は母親を通じて神を知る、此が教の由つて生ずる處といふ趣意なのであります。ペスタロッチはキリスト信者であるから、神を知ると云つて居ります。若し是を儒學者に云はせると天を知ると云ふのであります。或は哲學者に云はせると宇宙の真理を知る云ふのであります。母を通じて宇宙の真理を知る、母を通じてと云ふのは是は西洋流になる、即ち支那流に云ふと、父と云ふことになる。父といふものに親を代表せしめて居る。こゝに民族の性情の相違があるのであります。先づ親を通じて神を知る、神を知るのには則ち最上の智慧則ち神を知ると云ふ事になる。その上の智慧はない、人間の最上の智慧に入るのは親を通ずるのである。教育の終局は何であるか、前物の真相を知り、最上の智慧に達する是が教育の根底でなくてはならぬ。それは親を通じてと云ふのは即ち親に對する信頼であります。

そこで始めて人間の法則と云ふものが出て来る。今子供が走つて一つの石につまぶくと

云ふと、足に傷をする、是は天然の法則でありませう。道の真中に石があつてそれにぶつ突かる、ぶつゝかれば軟かい方の體が傷がつく、これは天然自然の法則で、人間が通るからと云つて石が逃げて居るものでなく、ぶつゝかつたら、氣の毒と石の方が軟くなるものでもない。此の點丈は冒すべからざる法則であります。つまづけば傷つく、此は自然の法則である。けれども法則と云ふ意義を子供は知らない。知らないのみならず、或子供は傷いたら怒つて石を撃つ石に逆つても石がどうするものでもない。要するに法則を如何ともする事が出来ないが、法則であると云ふ意義が子供には出て来ない。親が道の真中を無闇に走つてはいけない、石がころがつたり、木のこげがころがつたりして居るからつまづいたり人につき當つたりするといけないから氣をつけなくてはならないと、教へる親を、信愛する敬愛するから子供が之を守る。そうするとつまづかない、此處に法則と云ふものが現れて来る。唯經驗知識からゆくと子供はつまづいては傷づく自分が損である、こう言ふ所から利害の念に訴へて用心をする様になる。そういふ風に一心に我が利害を本として考へる様になる。食べ過ぎると腹を傷める、或は病氣になる、その經驗から物を食べ過ぎる

と自分の損であるとして、利害の念に訴へてそして食べることに用心をする。そういう風になると、生理の方法を、健康を樂しむために利用するといふ事になる。つまり利己的考から、衛生の道も起るのであるといふのは、自分が苦痛を受けるから、それで養生をする。甚しきは物を美味しく食べる爲めに運動をする。じつとしては美味しくないと今夜物を美味しく食はう、こらいふ事からぶら／＼出て歩く。なる程歩いて腹が減れば物が美味しい。それが天然の法則を利用して我身に利する事を考へるので、それは畢竟經驗による知識といふ所から来る。所が幼少の時に無闇に食ふてはいけないと親に教へられる。親を信賴する故、子供は未だ實地に經驗して居ないけれ共食べたいのをもちこらへる。そうすると生理衛生の法則といふものが、自分の健康の利益を受ける爲めに守る法則でなく、自分の尊敬する信賴する親の命令を法則として、之に従ふといふことになり、同じ法則が面目を替へて来る。此の考を以つて總ての法則に對しました時は、別に道徳法則とか自然の法則とか經濟法則といふものはない。總ての法則が皆我々が遵奉すべき法則になる。それに従ふことによつて、其の物の恩恵を受けるものなのであります。それを俺はこらいふ事を知つて居

ると法則の知識といふものを以つて自分の武器とする力とする。同じ知識が様子を變へて来るのである。所謂法則といふ意味である。カントの『倫理の法則を尊敬するは道徳の基である』法則があつて其れを尊敬するやうに言つたのはカントが學術的に論を進める順序に過ぎないといつてよい。先づ法則といふものがあり次に其に對し尊敬が起ると言ふは充分真相を穿つて居ると言はれない。法則といふのは客觀的のもので、尊敬といふのは此方に主觀的に起るものである。元、外にあるものと内にあるものは結局の所は別々の物でない。既に法則である以上は之を敬はねばならぬ。敬ふための法則でない、法則である故敬ふと言はぬ。敬ふ故に法則である。そこで法則と尊敬とを二つのものにするカントは道徳法の外に自然法則といふものを認めて居ります。それに對して尊敬と言はない、道徳法に對してのみ尊敬が起ると、法則に二色の法則を考へねばならぬ。尊敬するのなら尊敬の心は二つはない、敬ふと言ふことは一つでなくてはならぬ。どの法則に對しても敬へば同じ法則になるのである。であるから生理衛生の法則でも、健康になりたいといふ健康の利益を受けたいといふ利益の心から是に従ふと、法則を利用することになる。幼少の時から食べ過ぎては

いけない、養生せよと言はれた親の言付けは信頼尊敬する筈の親に言はれた事で尊敬すべきものである。親は尊敬すべきものである。そうすると生理衛生の法則が尊敬すべき法則である。生理衛生の法則は天然自然の法則でありその外に更に道德法がある譯でない。只此方の心持によつて違ひが生ずる。只子供心に法則といふやうな考へは明かでない。眞理法則を尊敬するといふは大人の言ふことである。大人も始めからそうでなく、尊敬すると言ふは對人的のものである。人間が人間に對することから起るのである。その人を尊敬することによつて、その人の言はれることを尊敬する。先生を尊敬する故先生の言はれることを尊敬する、先生の知識を尊敬する。眞理を尊敬するは、先生の人格を尊敬するのである。我々の判断と言ふは後の話である。教育は判断を先にしない、信頼尊敬を先にする。自分が正しいとか良いとか判断する、そうすると判断せられた正しいこと良いことよりも判断する自分が上に立つて是は正しいと認める。認める自分の方が上に立つ、自己の判断を先にすると自分と云ふものが先に位する。判断せられたものは後についてくる。それなれば判断した善に従ひ正に従ふと云つても、自分の私見に従つたといふ事になる。正なり

善なるものに従つたものでなく、そう判断した、已自分に従つたといふ畢意自分以上に出ない。我々が判断する所の善とか正とかは尊いものでない。我々は之を仰ぐ信仰する正とか善とかある、之は我々以上のものである。自分の信頼する所の親の言はれる事が、それがよいのである、正しいのである。そういふ良い正しい事は、自分以上のものである。自分の信頼する所の先生がこういはれたから、之がよい正しいといふ事は、自分以上のもので、自分の判断に訴へて正しいといふならば、自分以下のものになる。個人といふものから出發する所の教育は、そこで物の價值を轉倒してゐる。何んでも自分で判断した事ではなくては承知出来ない様では、何時迄も自分以上に出ることが出来ない。自分の小さい所に立籠つてゐるそれでは教育は出来ない譯である。先生のいはれる善惡を子供が判断するなれば、児童は先生以上である。學校に行かなくてもよい。自分は知らないけれども教へられることは間違いではないと考へるとしても、間違でないといふ事を知る筈はない。間違ひないといふ事をどうして知るか、それが知れてゐるなら先生にづかなくてもよい。先生のいはれることがよい、こういふのが尊敬の心である。そういふ良い心をもつてゐるの

であります。子供が知らずしてそれに従ふ正しいと知らずして正しいとも何んともなしに信ずる、信じなければ始めからもう教育せられる必要はない。又信頼しなければ學校に行く必要もない。先生がどんなことをいふか分らん。まあ一應聞いてみなければといふ考へで學校に入るものはない。獨逸語の先生は獨逸語を知つてゐられると信じてゐる。どれ丈け知つてゐるかを自分が知つてゐれば、自分が先生と同等である、知らないが獨逸語の先生を信じてゐる。そこで先生の所に行き獨逸語を習ふ總べて我々が教へを受ける習うといふは、そういう信頼心があるからである。それが赤子の心である。それは大人ももつてゐる、子供許りでなくして我々は一生涯そういう心をもつてゐる。乃木大將は偉い方であるといつても、どうして乃木大將が偉いか知つてゐる筈はない。若し知つてゐるなれば乃木大將と同じ地位になつてをらねばならぬ筈である。本當の乃木大將の心は分らないけれども、乃木大將は忠義な方であると信じてゐる。それはどういふ譯か不思議なものである。只信じてゐるから自然尊敬心をもつてゐる、だといつて向ふの心を掴んだ譯ではない。そういう人間に一種の働きがある。信から知にといふことをいひます。出發點をいへば、信

より出たのである。信ずるから知る。始めから知つてゐれば信ずる必要はない。けれども信じなければ人は知ることが出来ない、それが本能的に既にそうであります。

上前に申した様に吾々は感覺を信じて居る。信頼する心を持たないで唯感覺を信じて居る。聞いたり見たりする所の、自分の耳目を疑つたなれば感覺を信じない事になる。外界の事を吾々は耳目で知つて居る。こゝに山があり川がある、耳目を信じなければ山を山とし川を川としない。河の風景を眺め筏を見る、皆吾々の感覺を信ずるから感覺を働かす。そういうことは唯本能生活に外ならない。それが始めて親子の關係に於て信から知と現はれるのである。そしてその知識といふのは皆法則の形をとる。見れば知ることが皆尊い真理となり、真理には従はざるを得ない。真理の前には頭が下がるのである。であるから子供は親を通じて神を知り真理を知るのである。實際の教育は皆真理を授ける。それはつまりその本が家庭にあるのである。學校は第二の教育場所である。學校に入る子供はすでに出來上つて居るといつてよい、七八才になるとすでに基礎が出來て居る。勿論生れる時から性質がよいのも悪いのもある。これは如何ともすることが出来ない。子供が悪くない様にと

思ふならば母親がその身を正しくする、昔は胎教といふこともあつた。母が精神や品行を正しくして胎兒に好い感化を及すのである。生んだ自分の子を手眞似で教へてゆく、親のするを見たり、聞いたりするのが始めて教育である。口の先で教へても何の役にも立たない、どんなにうまくいつても分るものでない。まつすぐに行ひをするより他にはない。その生れつくと共にその家庭の教育で、それでほとんど土臺が出来て居る。それを受繼いで學校で教へるといつてよい。上の學校に入れば、ほとんど教育といふものはない。高等の學校に入ると特殊専門の知識を授けるもの、人生の主要なるところを教へるのは仲々難しい。余程偉い人間でないと感化を及す事が出来ない。それで教へば則ち父母に始まるのであります。家庭に始まるのである。總ての知識は遵奉すべき法則でなければならぬ。眞理と法則とは一つである。眞理は吾々の遵奉すべき法則を知るに外ならない。それで先刻申上げた知識慾や模倣性にその本來の意義があり根本の道理がある。實際丁度人間に食慾がある道理があり、身体を保つといふ道理がある。此道理によらなければ食慾で体を害してしまふ。道理に従つて食慾を導くのは衛生健康の道である。只体を保つといふ道理があると思

ふのである。然し未だ深い譯がなければならぬ。これ等はいづれも一身だけ全ふすればよい譯ではない。もつと深い意味がなければならぬ。自分が健康でなければ子孫を健全に育てることが出来ない。自分が健全に働かねば社會が立ちゆかない。他の人も健全に自分自分の仕事をしなければ吾々も生きてゆかれない。一身を保つといふことも大きな生命といふことになる。それを保存するといふところに深い意味があると思ひます。そうすると食慾といふものは、只一身を保つのみならず民族といふものを保ち、國民の將來を何處までも發展せしめ、或は人類の運命といふ所にまで關係して居るといつてよい。人間が食慾を誤れば人類そのものを誤る意味合がある譯であります。知識慾・模倣性は、何の爲にあるか、即ち人類といふその根底にむかつて、その眞理に通じなければならぬ。天がそういう知識慾模倣性に從ふを本能として授けて居る。丁度草木鳥獸も、本能を授けられてから、萬物と交通して居る、陽に葉がむかつて根が土に向つてゆく。取るべきものを取り、吐き出すべきものを吐き出す様になつて居る。そういうものを人間は生物の有機としてもつて居るが同時に心といふものが與へられて居る、一体知識慾模倣性、それは何であるか、人間が知識慾をも

つて居るといふ事が眞理のあるといふ確かな證據である。丁度人間が食欲男女の慾を持つて居るといふ事が、人類存続といふ大きな根底、民族の運命といふ大きな根底を有つて居るやうなものである。その根本によらずして目の前の慾に支配される、それで自己を傷ける。『眞理なければ知識なし』といふ名高い言葉がある。トーマスの言葉に『道なければ行く事なし、眞理なければ知ることなし』といふことがある。道路がなければ行く事が出来ない。眞理がなければ知ることが出来ない。吾々は眞理を求めるといふことが要領で、それで世の中に眞理がなければ知識がある筈はない。あつても無駄である。その根本に據らないと人間道徳に罪惡が起る。余り教育が普及し學問が発達すると、自己中毒を起す。今日思想問題が八釜敷なつて、中學の子供でも思想であるとか哲學であるとかいふやうな事をいひ出すやうになつたが、丁度古代のギリシャで段々文物が発達しギリシャ文明が爛熟すると例のソフィストといふものが出て来る。彼れは思想家である。一廉の哲學者をもつて任ずるものである。その歸著點は何であるか、教を信仰するといふことがない、哲人の教へ聖賢の教へを信ずるといふ考へはない。それでは本統の眞理に至る事は出来ない。だか

ら懷疑に陥つて仕舞つた。であるから人類一般が守るべき眞理といふものはない。自分の思ひ／＼に従ふ他はない。人間は萬物の尺物である、こゝにいふ事を言い出したのである。こゝに人間といふのは一個人のこととでその一個人が萬物の標準である。一致點はないから、思ひ／＼にやる外はない、そうなると法則を無視する。その時にソクラテスが出て來てどらいつたかといふと『お前のいふのは間違である、自分のいふ事こそ正しい』斯ういふことをいはない、そゝいふ態度でない。若しそゝいふ態度に出たならば、いま一人、もつとひどいソフィストが出たことになる。ソクラテスはそれと反對に、俺は何も知らない無知である。只無知であると云ふことを知つて居るといふ外にソクラテスは何も知らない。少くとも自分自身は末だ物がよく分つて居らぬと云ふ事を承知して居るので、己れをむなしゆうする。自分の量見を捨て、仕舞ふ。それが出發點である。あゝだこらだといふ事を言はない。自分の量見を以て向ふにかぶせかける様なことは言はない。どういふ風にしたら、人を實際に導くことが出来るかを考へた結果そゝいふ方法を取つた。何も知らんと云ふのは一種の方便で、知つて居る事は知つて居る。違つた時代に出たならば違つた法を取つたかも知れ

ぬ。時代が時代なら孔子の様にあゝだこうだと弟子に云つたかも知れぬ、國により、時代に
より、人の態度が違ふ、畢竟ソフィスト等は知識を求めて居る。その眞理を求めて居ると
いふその事が、眞理の存在の證據であるといふことを知らない。人間に男女の慾があると
いふも夫婦の態度がある、夫婦の嚴かな態度がある。其處に道德がある證據である。そ
れに氣が付かない。それを知らないから、男女の道德を破る。世界の秩序を破る。ローマ
は男女の慾をほしめしにした。それが國を亡した一つの原因である。その如く知識に中
毒すると、知識が自分自身を破壊すると言ふことになる。それがソフィストの状態である。
皆教の由つて生ずる處を掴まないで、自分の判斷知識といふものに余り頼り過ぎる。自分
より上の人を信賴する觀念がない。それは何處から起るか、今いつたペスタロッチの母を
通じて親を敬愛するのがその基である。

扱てそいふ信賴の念が起るのは、どうして起るのであらうか、勿論どうしてといひま
しても、そいふ所謂良知といふものを持つて居るに相違ない、それを説明する譯にゆか
ない。それが人間の人間たる所である。凡そ説明には限りがあることである。最後に突當

つてもう説明することは出来ないけれ共、その赤子の心といふものを呼起す條件がなけれ
ばならぬ。條件といふものはよい加減の都合の良い條件でなく、敬愛信賴の念と根本に於
て相通ずるものがあり、互に相呼び應ずること響の聲に應ずる如くであります。それは外
ではない親の慈愛である。只なんととはなしに、何でも信賴する敬愛するといふ譯でない。
物心が付いて見ると、親の慈愛を被つてゐる。生れ落ちると親の慈愛が子供心にそれが分
つて来る。母親の足音は赤ン坊が知つて居る。抱かれても、他人に抱かれるのと、母親に
抱かれるのと、心持が違ふ。親は之を生む、隨つて此を愛し此を保護する。その成育愛護
の働に應じて、敬愛信賴の心が起る。慈愛といふものと尊敬といふものと此處で相呼び
相應じて居る。一方に慈愛があれば、それに對する尊敬がある。自分をいつくしんで下さる
人には、自然に尊敬信賴の心が起るのであります。人々についていへば色々違がある。何
れも人の子は親を愛せざる者はないが、人の性質に依つて、矢張り其の愛する仕方に厚薄
は免れない。又總て人の子は親を信賴するのでありますが、此も子の生れつきによつて、
厚薄があるのであります。そいふ人に依つて違はあつても、矢張り萬人を通じて、元來

親といふものは、子の可愛いもの、又元來子といふものは、親に信賴するものである。その眞理は間違でなからうと想ひます。それでその親の慈愛に對して信賴が起る。然し子は信賴すべきものだとの權利をもつて子に臨む譯にはゆかない。親からして親の道を盡さねば、子に良知といふものが起らない。學校に於ては先生を敬愛すべきものに相違ないが、只そう要求したのでは、敬愛の心を喚び起すに價しない、敬愛に値する様に、我々の方でやらねばならぬ。親はそう努めなくてはならぬ。眞劍に子愛する、其處で親の云はれる事に皆服する。親の云はれることは、決して自分の爲めに悪い事はないと、自分で承知して信賴する、右の方に行けと云はれたらその方に行く。正しいか否か判断がつかないが、然し生育愛護せられる感じから、自然にその心が起る。そう云ふ譯であるから、母を通じてといふ、母は即ち慈みのかたまりである、それを賢婦慈母と云ひます。一方にいつくしむ慈愛がある。それに對し尊敬する信ずる、そうすると尙可愛くなる。互に呼應する様になつて居ります。であるからなる程尊敬信賴から我々は法則を知ります。或は尊敬を起すの極慈愛の心を生ずるのであるから、尊敬と慈愛の二つのものでも法則に達する。即ち眞理を知

ると云つてもよいのである。その法則と云ふものは、家には家の法則がある、社會に出れば社會の法則、學校には學校の法則、國には國の法則があり、天地には天地の法則があります。何物でも物があれば必ず法則がある。櫻の木があれば櫻の木の法則がある。則と云ふのは佛教等で法と云ふ、即ち眞理である。佛の教が法でありませうが、佛か勝手に作られたものでない。萬物の眞理が法である。則は萬物に具つて居る。櫻の實から櫻が出来る。麥の種を蒔いて米が出来るると云ふことはない、麥には麥の則がある。米には米の天性がある。則は即ち天性である。最初の知識は何を知るか、即ち則を知り物の天性を知る。其眞の性質を知る。それが知識の目的である。そう云ふ知識智慧を生むものは先づ我々が其教へる人を信賴するにある。そこで家にあつては其親の云ひ附を守る。家の法則が出来る。兎に角家には家の様な規律がある。朝は起きる晩は寝るとんな家でも何時も起きてゐる家はない。三度の食事でも何か法則がないことはない、其法則に従ふと云ふ、こゝから所謂神を知ると云ふ我々が、神の法則に通ずる。萬物の理法を知る。理法によつて我々が行ふ。それで萬物を我々が調和する。それで我々の生活を全ふすることが出来る譯であります。所が萬

物の理法等そう云ふことは、我々がた易く云ひますけれ共萬物の理法に通じてゐる譯ではない。誰とて萬物の理法に通ずることは出来ない。聖賢と雖もそう云ふことは出来ない。人間に限りある以上、隅から隅まで通ずることは出来ない。天下の秩序萬物の理法と云ふことは、我々が行き渡ることには出来ない。道德の言葉で、信とは善なるものである。邪は正に勝たずと云ふことを、段々云ふやうになつたが、若し邪が正に勝たずと斯う云ふことが眞理でないとするれば、どんなよこしまな事をやつても、やり遂げるのであると云ふことになる。道德に於て變らない所、萬古變らない所に眞理がないとするれば、只便利主義で、兎に角都合のよいやうにやればよいと云ふことになる。然し萬古變らない法則と云ふ様なことはた易く云ふことは出来ない。それを我々が云ふと云ふのは、矢張り信仰である。であるから知識慾に中毒した所の教育は、段々そう云ふことを疑ひ、天地の理法等、そう云ふ事は貶すのである。萬物の秩序と云つても、それを受附けない。人間社會に道德があつても、それを信じない。道德と云ふものは社會を支配する所の有力な者が、自分の都合のよいやうに決めたものである。所謂強者の權利である。其外に正義と云ふものはない。こう云ふ

考へが起る。それはつまり世の中を信じない、人生に對し信頼をもたないからである。それも無理はない、人間の世の中に多く偽りがあるから、自然にそう云ふ疑惑の心を起す様になるのである。又神も佛もあるものかなどと云ふ様な、こう云ふ考へも起る。随分正直にやつてゐるが、或は病氣になる、貧乏する、或は人から悪くせられた、色々の邪魔を受けた、力あるものが伸びることが出来ない、認められない、順境がくれば逆境が来て、思ふ通りにならない。そして不正な事をしてゐるものが、余程繁昌してゐる。信とは是か否か、こう云ふ考へが起るも無理はない。そう云ふことが人間の智慧で決めることが出来るものでありませうか。百年経つても千年経つても勿論知識の上で突止めることは恐らく出来まい。そうなれば天地を信じないか、世の中を信じないかと云へば、矢張りそう云ふ人でも、信じてゐる。腹の底でそれを信じなければ生きてゐることが出来ない。確固たる信念は却々もてないが、兎にも角にも、我々が世の中を信じてゐるから、教育者は教育者で、そう云ふ仕事をしてゐる。商業者は商業者で自分の仕事をしてゐる。充分眞面目でなくとも大部分眞面目である、不眞面目のものも交つてゐるが、大體人間は眞劍にやつてゐる。矢張り

自分の店に来てくれると云ふ事を信じてゐる、彼處に行けばあれがあることを信じてゐる。悉く正直にないにしても、悉く悪いものをつかませることはない。あの店に行けば先づよいだらう。そう云ふ風に信仰があると見なければ、手も足も出ない。品物一つ買ふことも出来ない。互に人は信じてゐる、其人を信ずることが根本の一人になるのであらう。時には、道德等と云ふものはないので、それは所謂資本家階級が自分の都合のよい様に作ったものである。それに従ふのが愚かである、自分自身が有力な地位に立たなければならぬ。そう云ふ考へが起る。それには譯があらうと思ひます。そう云ふ考へに少しも眞理がないとは云はれないのであります。一部に眞理はあるに相違ない。最初から丸切り間違であると云ふ譯はない。只其一部分を擱へて、それで全体であるかの如く考へるのが悪い。斯う云ふ様に考へるものも、矢張り今日生活してゐる、少くとも家族を信じてゐる。そうでないとすると一家の中も、矢張り金力の考へでやらねばならぬ。主人が金を儲ければ、主人の権力を振り、女房が金を儲ければ、女房が家の法則を施す。之が社會主義の考へでなければならぬ。然るに實際は矢張り信愛の情があり人情がある。それを考へれば人間社會に於てもそ

う考へねばなぬ譯である。矢張り吾々斯く暮してゐると云ふことは我々が吐の底では互に人を信じてゐるからである。さもなければ、こうしてゐられる譯がない。それと同じ様に我々が天地を信じてゐる。天とか神とか云はなくても、天地を信じてゐる。矢張り太陽は昇る。春田植してをけば秋になれば稔る。春花を開き、秋實を結ぶと云ふことは、天地が我々に眞實を示してをる。偽がないといふことは、反つて萬物の有様が示してをる。人間に偽がある。草木鳥獸に偽がないと云ふ事も出来る。どう云ふ懷疑者もどう云ふ道德を信じない連中も、そう云ふ意味合ひで、これから演説しよう、何日の幾時何處の場所で演説をやる、こう云つてをいたならば、人もそこに集ると信じてをる。これを信じなければ、演説する事が出来ない。宣傳することや、パンフレットを配付する事も、自分の意見をそれ述べてをけば人がそれを讀む、そうすると自分の云ふことが腹に入ると、これを信賴して我々は社會運動をしてをる。自分の信賴心の下に反省して見れば、立派な道德であると云ふことに氣が付かなくてはならぬ譯である。けれども世間は多く欺し合つてをる、中々悪いことをしてをる。そこでそういふ方面ばかり考へると疑ふやうになる。所が今親はどう

であるかと云ひますと、親の膝元にある間は、子供は先づ安樂國にあると云つてよい。順境逆境の區別がない、貧乏の家も富んだ家もありますが、子供はまだそう云ふ貧富と云ふ様なことは餘り考へない、これを生み、これを育て、これを愛し、これを保護する。恐るべきものあれば其れを除きます。母親は女性であつても、犬か吠へつけば、子供を保護する。或は又水の中にも飛込んで助ける。どう云ふ勇氣でも出す。子供を保護する上では如何なる事もやる。そういふのが慈愛の至りである。自分は食べなくても、子供に食べさせる。いよ／＼食ふことの出来ない時は子供を道連れにする。子を愛する心からいへば如何にもそうである。親を失つてしまつて、後で難儀をするといふ同情に堪へないからして、生きてをる限りは何んとかして子供に苦痛を與へない様にする。であるから親の膝許にある間子供は苦痛を知らない、朝飯を食つては遊んで、何心なく飯を食つて安樂と思はずして安樂してゐる。世間に出ていろ／＼の風波に出逢ふ。こゝには良い事悪いこと辛い事もある。初めて人世に對する不安を知る。人生觀が起る。いろ／＼の苦惱をおこすのである。子供はそれを知らない、全然世の中が安樂である。西洋に人類の初めに樂園のあつたといふ様な

傳説があるが、恐らく子供の親の膝許にをつた時の境涯を書いたものではありますまいか。其の時の神様を親といつたでせう。親の保護にあつて親の人間のためにつくして下さつた、バラダイス、何んの不足なしに、何の思ひもなく暮してをつたと共に、それが善惡の知識を知る様になつて、追出されて初めて人生の苦痛をなめる様になつたと思ひます。子供が成長して世の中に出て行つたことを云つたのでありませう。安樂境涯にをるのであるから疑が起らないのであります。絶對的に信賴するのであります。絶對的に信賴するから其の命令に従ふ、云はれる通りになる。木の實は食べてはならないと命令があつたら、其の通り食はない。若し幼少の時親に對する信賴の念と云ふものがあれば自分自身の境涯に通つてゐるそれが信賴である。面倒な事態が例へ世間に出ましても、やはり人生を信ずることは出来る。家庭が悲惨であると自然に子供がひがむ、人を疑ふ、世の中を良く思はない。勿論生れつきにもよるが善良な家庭に育つと、親を信ずるから學校に入つて、自然に學校を信ずる。先生を信賴する、世間に對し良い感じを持つのであるから、これが即ち學校を信ずる或は先生を信ずる、神を信ずることの元となり、母を通じて子供は神を

知り實の信仰を持つと云ふことになる。總べて人は子供としてそう云ふ信頼心を持つのであります。その基礎が出来ると天道を信じる。若しそれがなければ天道是が非かと云ふ事を人間の智慧でもつて何も解決出来ない。それが懷疑論者でなければならぬ。教育が普及すると良い事もあるが何處までも良いと云はれない。どう云ふ良い者でも、中毒と云ふ事があるから、どう云ふ慈養物も過ぎれば害になると同じ事である。その根柢に遡つて其の本を疑はない様に考へて行かねばならぬ。それで道德と云ふものは敬と愛から始まる。そう云ふ風に説いて良からう。それは畢竟信から起る。信と云ふ心を別けてみると、敬愛の二字である、敬すると云ふことから、これから所謂智慧と云ふものが出来る。智慧と云ふこと、知識とを區別した意味で實は知識と智慧は一つになる譯であります。所謂知識慾と云ふものから、敬ふと云ふ考へを取り去つたとすると、そう云ふ知識は善にも惡にもどちらにもなる。徳のない金の様なものである。金錢も良い方に使へば善をなし、悪い方に使へば惡をなす。金錢は良いとも悪いとも云はれない、知識も良い方に使へば世に益する、悪く使へば悪くなる。學校は智を授ける場所である。そこで學校の教育の根本は何んである

か、生徒が先生を敬ふ、先生は生徒を愛する。之が教育の根本である。丁度一家にあつて親が子を愛する、子が親を愛するので、敬愛と云ふことは元來相呼應したものである。元來人の信から出たものである。愛と慈愛は區別しなくてはならぬ。我々の方では慈しむと云ふ言葉がある。之でなければならぬ。愛と云ふと國を愛するも、地位を愛するも、同じ愛になる、其子を慈しむとはいふが、高位高官を慈しむといはないで愛するといふ。愛すると慈しむの區別を知らんことが現代思想の混亂の大なる一つの原因である。愛は良く考へると慾といふ別名である。物を欲するは愛するといふ慾望の事である。慾望でなく慈愛で行かなければならぬ、智慧と慈愛とは道德の二本の柱といつてよいのであります。智慧は眞理法則を知ります。慈愛といふものは物を生かすもの、恵むもの、生命から出で、且生命を養ふものが慈愛である。道德は一方では正義法則、一方では人情慈愛であります。その二つのものが結局は一つであります、それは即ち敬愛の心から出てくる。教育の出發點は子供の此信頼心で、その教育の出發點が其のまゝ道德の出發點となる。その教育道德の出發點がそのまゝ國家の根柢となる、國家は法によつて成立つてをる。

法の無い所に國家はない。同時に國家には人情が無くてはならぬ。その根本は一つである。

以上は教の道をば親子の道である。親に對する子の信頼敬愛の感情、之が教育の出發點である。同時に人間が法則を知る、即ち眞理を知るといふ事の出發點である。人間の智慧のよつて生ずる所は知識慾でない。所謂母を通じて神を知る。宇宙の眞理を知るといふのは親の慈愛に對する子の敬愛の感情からいつてゆくのである。そういふ趣旨を申上げたのであります。それでこの敬愛といふ事を之を兩方に分けて一方は敬する一方は愛するとするとも之は實際そう離れないのであります。然し又何れにか重きを置くことはある、敬といふ心持の主となることもある。信愛するといふ感情が主となることもある。二つのものが別れますると敬するといふことも愛が伴ふ。愛することは敬する事の意味を失ふて愛するといふことになる。所謂盲目的愛情になるのであるから離すことは出来ないけれども、自ら主とするものがものによつて違ふのであります。それで愛の奥に生命、敬の奥に眞理、生命と眞理が一になると之が所謂實相、西洋の哲學で實在といつてゐる。この兩面から見てどうして

人間に愛情があるか、其の根底に生命があるから愛情がある。何故人間に知るといふ事があるか、知るといふことの根本に眞理といふものがある。之はつまり心理學でいふと、知と情である。其の外に意志といふものはない。知情意といふ場合三つの對立といふ事はない。對立は何時も二つのものである。然し二つのものが對立すれば必ず第三者があるに相違ない。何故ならば對立といふことが其裏面が一つでない、對立しないから、其の二つのものが丸切關係しないなら對立しない。對立といへば二つであります。裏面に一つのものがある、それで三つになる。第三のものは裏面に出ない、現はれて對立するものは二つのものである。我々の心理現象でいへば知と情である。知と情を一つにする意志である。意志といふことは一番根本といふことも出来る。然し意志といふ特別のものがある譯でなく知と情と合一する事が意志である。今日の話は昨日申上げた本能とか或は知識慾とか、模倣性とか之は我々の心の働きであります。そういふものを天然自然のものといふ。そういふ風な修養を加へない己れの儘のものを自然といふのである。道徳といふのは之を磨いて、而して自然の根底へ行くものである。假令ば自然は荒金の様なものである。荒金から

段々粕を取つてしまつて其の中に這入つて行く、そうすると銀とか金とかいふものが出る、それが本物である。我々は天然自然に本能とか衝動とか或は慾望とかそれは只表面に現はれた天然自然のものである。それがあると必らず其の奥に光つてゐるものがあります、それを道徳と稱する。そうするとこゝからそこに行く道がなければならぬ。所謂修養といふことがなければならぬ、切磋琢磨するところのものがなければならぬ。そういふものを工夫ともいへば、或は修養とか修爲ともいふ。この關係を御話しようと思ふ。

それで自然でありますと、このものは所謂主觀的に愛慾と名づけてよい。他の一方は知慾である人間の慾は愛慾と知慾との二つしかない。愛慾といふものが何を愛するかといふことによつて千差萬別が起る。概していへば愛慾知慾であるとして人間に愛慾があるか、どうして人間に知識慾があるか、こういふとそれが即ちその奥にあるもの、一は生命であり、一は即ち眞理である、或は理法である。それで此處に至る修爲工夫それが丁度教育になる。其の教育のよつて生ずるものがなければならぬ。實際に現はれてゐる所のものは愛慾である知慾である。そうすると愛慾と生命の仲介をするものがなければならぬ。之を出

發點としなければならぬ。愛慾と生命の仲介それが即ち教の由つて生ずる所である。それが親の子に對する感情である。所謂敬愛であるといふのは何んであるか、親の子に對する感情といふのは親は子からいへば自分の元なのである、自分の奥でこの奥から出て來たものである。愛慾の奥に生命が、知慾の奥に理法があるとすれば、生命といふものから愛慾が出で理法から知慾が出る。親から子が出てくるのである。其の子が自分の親に向つて行くのは即ち自分の根柢に向つて行くといふことになる。自分の根本に立戻るのが即ち信賴敬愛の感情である。其の眞の敬愛の感情といふものを擱へてそれを教育の道にする。そこで元に還るといふこと之が教育の要點になるのである。天然自然の本能から道徳にゆくのも畢竟天然自然の本能が其根底に還るので、自然の根底は道徳である。自分にもどる報本反始といふことがある。子供の信賴敬愛の感情が根本である。親に報ゐるといふのも始めにもどる感情である此を反省といふ、反省は自分の本に省みてるのである。反始しよといふと親の心を尋ねてみようといふのである。教育は即ち反始の道である。修爲工夫は外にあるのでなくして畢竟其の元にもどる以外にない。愛に敬が加はると同時に敬に愛

が加はる。離れてはいけない此は生命と理法とに反へるのである。生命にかへるといふことは愛することを知る。即ち反省である。愛することを愛するのが敬愛である。知ることを知るのが智慧である。知慾の奥に理法がある、此にかへるは子が親に還る道である。子の親に對する感情である。即ち敬と愛の二つである。愛を主として慈愛といつてよい。敬を主として敬愛といつてよい。その慈愛といふ方は愛の方面、敬愛の方面は智の方面である。生命に還るのは即ち敬と愛の二つである。生命に還るのは即ち自分の生みの親に還るのである。親の生命が子の元で、親に還るのは即ち生命に還ることになる生命に還るといふと働きの上でいへば愛することを知る。愛するといふ事を知るといふのは、自分の愛するといふことを知るので假令ば自分の子が可愛い、只自分の子が可愛い、なれば愛する丈であるがそれを知るといふのは子を愛して居ると氣が付く事である。即ち自分は子を可愛がるといふ心を反省するのである。只可愛がると自分が可愛がつて居ると知るとは非常に違ふ、天地の相違がある。普通に親の愛情といふものを盲目的といふ事をいふ。その親の心は闇である。總て愛慾といふものは盲目的のもので、親の愛情であらうが、男女の愛情であら

うが、金錢の愛情であらうが、慾と云ふものは盲目的である。其の愛する心を反省しないで、只可愛いがる一方で、それに没頭して仕舞つて居る。そこで已あるを知つて他あるを知らない。總ての慾と云ふものは一つの専制者である。他のものを押へるのみで自分自身に氣がつかない。よく世間に子を持つて親の恩を知ると云ふ言葉がある。子を持つて親の恩を知ると云ふのは子が可愛い、その心を反省したのである。一生懸命に子を可愛がつて居る、自分は如何にも子は可愛い、ものであると、つくづく自分の子の可愛い、と云ふ心を自分で考へつくのである。そうすると所謂親の恩を知るのである。なる程自分の親も自分を可愛がつて下さつたのであらうと氣がつくのである。盲目的に子を可愛がると云ふと親を粗末にするのである。子は自然に親に對して信頼敬愛の念を持つて居るけれども、自分のその親を信頼敬愛して居つた子が、自分の妻を持つ様になると、所謂る妻子の愛に奪れてしまふ。そうすると親を粗末にしようとは思はないが妻子の愛に心を引かれて何時とはなしに親に對して粗略になる。そう想はないが自然にそうなる。然るに自分の子が可愛い、と云ふ心に氣がついて見れば子は可愛い、ものである。して見れば親も定めし可愛がつ

て下さつたであらうとここに氣がつく。所謂子を持つて親の恩を知ると云ふのである、即ち自分の愛する心を反省するのである。それを總ての人に及す事が出来る。恕すと云ふ思ひやりがある。自分の子が可愛い、から、世の中の親たる者は自分の様に子が可愛い、ものであらうと、己を推して人に及すと云ふのは、此の事である。自分が金が欲しい定めし誰も欲しいであらう、即ち自分の金銭を愛することを知る。知らない間は愛するのみで貪欲である、如何にも財寶は欲しいものである。凡そ天下の人は皆欲しがらうと云ふことに氣がつく。それが己を推して人に及ぼす、所謂思ひやりと云ふはそれである。反省することは自分に具つてゐる。色々の愛慾を反省する、それが廣いものになる、自分許りでなく一般のものになる。そうすると愛することを愛する、愛することを知ると云ふことである。知と愛とは互に働き、知るから愛する、愛するから知る。敬愛を離すことが出来ないと言ふのはそれである、知らないことを愛することは出来ない。立派な洋傘があると欲しいのは、洋傘を知つて居るからである。田舎に居ては立派な洋傘を見る事は出来ないが、都會に出て見るとそれが欲しくなる。知らんことを愛すると云ふことはない、又愛するから知ると云ふ事にもな

る。愛するは求める、好きこそ物の上手で、慾があるから知識を得る、知識慾は物を知る様になる、智と愛は循環して居ると云つてもよい。愛することを知れば愛することを愛するに至るので、人の慾を遂げさすべく思ふのである。人の親が子を愛するなれば、その愛する子に對する愛情を遂げる様にしてやりたいと思ふ。人が金銭を愛して欲がつて居ると云ふことを知れば、愛するものを遂げさしてやりたいと思ふ。男女の愛情と云ふものがあるれば男女の愛情即ち天下の人をして、皆男女が配偶を得る様にさせたいと思ふのでありませう。孟子にある様に孟子が齊の宣王に仁政と云ふものを説法したとき、宣王はそう云ふ六ヶ敷しい事は自分に出来ない、自分には寶を好むと云ふ病氣があるから、仁政等は出来ぬといつた所が、孟子がそれであるから仁政が出来る。昔周の公劉と云ふものは寶を好んだ、金銭財寶が大好きであつた所から氣がついて、成程人は財寶を欲するものである、人間は寶の欲しいものであると云ふことに氣がついて、天下の人を富ませようと圖つた、そこで公劉の一生涯の中に周の國は富んで、農家が皆倉に米を積んだ。だから好むと云ふことは累ひにならない、寶を好むと云ふ事から天下の愛情と云ふ事になる。寶を好まなかつた

ならば天下を富まし仁政も出来なかつたかも知れない。ところが世間の人は其の思ひやりが出ない。宣王は更に寶はそれでよいかも知れないが自分は色を好むので、仁政が行へまいといふと、孟子は昔大王は色を好む、自分の色を好むといふ心を知つて、人間の愛情はこゝろに氣がついて、周の國中の男女が配偶を得る様に、男子は家内を持つ様に、女子は夫を持つ様に、色々盡力せられた。そこで大王の一生の中に夫といふ配偶を得ずして怨んだり、妻を得ずして淋しく暮らしたりするやうな男もない様になつた。何んの慾でもそれを一般に及しさへすれば、それが道德である。普通に慾が道德の邪魔であるといふが、其の悪いといふ所のものが、それが道德である。只の愛慾であると、それが毒であつても、一般に及ぼすと其れが立派なものになり藥になる。それで生命になつてくる。こゝろいふ譯で畢竟一言でいへば反省といふ事である。自分の本に反ればよい、その愛慾が本に返れば慈愛といふのである。天下の人を富ませてやりたいといふのは慈愛である。世の中の人に配偶を得させてやりたいといふのも慈愛である。子を受するといふのも、盲目的愛情では慈愛といふ事は出来ない、子を受するといふことも愛慾である、やはり自分の慾を

遂げるといふことになり、自分で私するといふことになる。子供のことが元になつて悪い事をする、喧嘩をする、金銀財寶の慾も子の事から起る。子の爲に悪い事をする私するといふ事が起つてくる。慈愛といふことはさういふ事でない、盲目的愛情と違ふのである。その區別は我々も知つてゐるが、所謂自然主義といふものはこの區別を知らない。夫婦でも愛が本であるといふ事をいふが、其の愛といふ事は男女の愛慾である。愛がなくなつて失へば夫婦別れをする。愛情が生れたらすぐに夫婦になつてもよい、愛情が續く間夫婦であるといふ譯であると、本能的になり一時的になる。夫婦相和するといふも敬愛から這入つて行かねばならぬ。西洋では夫婦相愛するといひ、我々の方では夫婦和するとか、夫婦別ありとかいふのである。別であるから和する、和するといふことは愛慾でない、情誼である。愛慾は瞬間的で情誼は永久變らない、年をとつても容貌が衰へても情誼が變ることはない。愛情といふと容貌其の他氣質が合ふとか合はんとか、趣味があふとか合はんとか、さういふ總て移り變るものがある。こゝの區別を立てなくてはならぬ。この愛慾を元とする

れて居る。吾々の家庭にも何時の間にか子供がそういうふものを讀んで居るが、愛慾が本で出て來たのである。才智のあるものはどういふ事でもいふことが出来る、色々の理屈をつける事が出来る。そうなると所謂才智のある者が却て害をなす。どうしても道德修養からやらなくてはならぬ。只學才があるとか聰明であるとかいゝ加減な理屈をつける、それが害をなす。ソフィストがそういうふものである。教育が普及する、思想が發達すると、そういうものが出て來る。愛慾と慈愛といふものを區別しなければならぬ。宗教では慈愛を慈悲といつて居ります。而して愛慾といふのは、宗教では愛着愛執の念止め難しなどいつて、煩惱、罪障、罪の障りとなるもので、子を愛するといふ事も罪障煩惱で、金權・權力・名譽を愛する、皆これ人間の煩惱である。それを慈悲と取違へてはいけない。いつくしむは愛すると違ふ、男女の愛情を慈むとは云はない。そこで孔子は仁といふ事を説いて居る。慈愛のよつて生ずる根本を仁といつたのである。兎も角仁といつた言葉は西洋では愛といふ。愛といふ言葉しかないが、その點丈でいへば不完全である。キリスト教で兄弟を愛するも、人類愛も、金を愛するも皆同じ言葉を用ゐる。我々は人類愛といふ言葉を用ひな

くてもよい、立派に慈愛といふ言葉がある。西洋では愛しかないから、人類といふ形容詞を持つて來なければならぬ。人類といふ詞を用ひて悪い事はない、今日はそういう風になつて居る。西洋人式に人類愛といつてもよいが、之をいふに始めから慈愛といへば間違でなかつたのである。キリスト教の愛いふのはこれである。キリスト教では天上の愛、地上の愛の別を立てる。汝の父母をすて吾に隨へよといふ事が耶蘇の教である。それも地上愛であつてはいけない、地上に心を寄せると天上に心を寄せる事が出来ない、所謂天國に入る事が出来ないことをいふ。吾々の方では愛と慈と或は仁と言葉が別になつて居るのである。そこでその慈といふものが即ち生命と一致するのである。慈しむとは何であるか、生命を慈しむことである、慈しむとか恵むとかいふが、草木が芽を出すのを芽ぐむといふ、即ち生む事である即ち慈といふ事は生かす事である。恵む、生かす、天下の人を生かす、皆富ます様にする、衣食の足りる様にする、天下の人をして配偶を得さしめる。即ち生かす即生命を與へることになる。愛慾そのものは生命を奪ふ、夫婦關係を破壊する、自分の爲に一般を害する、食慾のみであると病氣になる。そこで根本に還へらなくてはならぬ、そ

れが眞に生ずるものである、それで始めて生命といふことがある、愛慾は生命の發露であります、生命に逆ふ性質を持つて居る。愛敬となると、子が親を愛するのは、犬猫と違つて敬の意味があるから愛敬である。大切にするといふ意味があるので、愛してやるとか愛して呉れるとかいふのではない。

日本の國體では天皇は人民を大切に遊さる、最大の一番の寶は人民である、所謂大御寶である。慈しむといふことは大事にするといふ意味がある。尊ぶ意味がある。或は徳愛といふことが中江藤樹の書物にあるが、慾愛徳愛といふ區別がある。慾愛、徳愛は丁度地上の愛と天上の愛に當るが、そこに行くに想ひはやりでゆくのである。子供の時からいへば所謂赤子の心で、子供大人を通じて一般にいへば思ひやり、教育からいへば赤子の心を出發點とする。孔子は或時は「孝悌は仁をなすの本」と云はれたが、此は幼少な立場から云はれたのである。「己の欲せざる所を人に施すこと勿れ」。これは大人に教へられたのである。それから知欲の方、これは前に、知ることを愛する前には愛する事を知ると云つたが、知る事を愛すると云ふ事は知慾でない。元來知識慾と云ふのは所謂好奇心である。それで此の

頃よく云ふ征服、飛行機によつて空中を征服、汽車によつて陸路を征服すると云ひ、或は山に登つて山を征服するといふ様に、征服の言葉が用ひられるは、現代が自然主義であるからで、自然主義と云ふものが勢力を持つてゐると云ふ一つの現れである。知慾と云ふものはその征服力である。西洋の言葉に知る事をマスターする、あの人は物理学を知つて居る主人となると云ふのである、征服して自分に随へて仕舞ふ斯う云ふのである。斯う云ふことは東洋にない、民族の性情を表したものである。慨して西洋では自然を本にするがキリスト教のみが違つて居る。古代の哲學はそれと違つて居るので古代の文化及キリスト教と云ふものは、ヨーロッパの民族と云ふものを文明化したものである。至つて我の強い個人的である所の剽悍な民族であるのを和けて、慈愛と云ふ方に導き文明人にした第一の働きはキリスト教にある。キリスト教では地上の愛を退ける、キリストは知識と云ふものを退ける。知識と云ふものは天國に居ると邪魔になる、知識のあるものほど慢心が強い、物を知る程傲慢な心を持つて居る。人間も善惡を知るによつて墮落したと云つて居る。知識と云ふものをそんなに有難いものに思はない。長崎の郊外に浦土村と云ふのがあります。皆様

も御承知でありませうが、あそこは一村擧つて天主教で、例の島原以來のことである。其の所に大きな天主教會堂があつて子々孫々天主教を信奉して居る。先年行つた時其所の學校の先生に聞きましたのですが、そこでは學校の先生が子供の取扱に困ると云つて居られた。どうも先生の云ふ事を聞かん、親も聞かないから子もきかん、神父と云つて牧師を神父と呼んで神父の云ふ事なら聞く。段々八釜敷なつて神社に參詣すると云ふことを強制的にやらせる様になつてたのであります。此の村では上の學校に入らすといふことは好まない、神父が好まない。知識と云ふ事は良い事と思つて居ない、世間に所謂知識と云ふ事は悪魔の業である、知識のあるものは光り輝いた悪徳であるとして、智慧と知識と區別する。智慧と云ふは神の心理を知るのであつて、知慾と云ふは、ものを支配するものである、知識は力なりと云ふ言葉もそれである。物理学を知つて居れば汽車を走らせる事が出来る、汽船を浮かべる事が出来る、學問の應用で戦をする事が出来る。元來知慾は物を支配するのであるが、知る事を愛するのは知識そのものを愛するのである、知つてどうしようとか利用する考へはないのである。支配慾、利用慾でなくして知るその事を愛する。そこでギリシ

ヤの哲學と云ふのは智を愛すると云つて居る。智も極く用心して智慧を愛すると云つて居る。ギリシヤの言葉でフィロソフィヤ、英語で翻譯すればウイズダムと云ふ。フィロソフィヤト云ふのは知る事を愛する、こゝで愛すると云ふのは敬ふ心がこもつて居る。それを大事にする意味がある。そこでフィロソフィヤとは智慧を愛することを云ふ。ギリシヤの言葉でエロスと云ふ言葉もある。人間の心は自分の根本を知つて人間の魂が自分の故郷を愛好する。それをプラトンはエロスと云つたのである。故郷とは根本である、人間の心が故郷を慕ふのを愛と云つたのである、即ち元に還るのである。ギリシヤの智を愛するのは今日の知識慾と混同すると大きな間違であるが、それを矢張り混同して居る學者がある。智を愛することを知識慾と思つて居るが寧ろ此は憧憬、憧れる、仰ぐ、と云ふ様な意味がある。子が親を敬愛するのは即ち親は自分の本である。親の云はれる事に従ふと云ふのは即ち親といふ者は智慧の固りである、親の云はれることは皆善い事である、正しい事であると、子供は何とはなしに思つて居る。學校に入ると、先生の云はれる事は間違ひでない、先生の書ける事は間違ひでない、即ち信仰して居る。その信仰心がないと、イロハと讀めと云はれて

も考へて見なければ滅多にイロハと讀まれないといふことになるが、先生は即ちウイズダムの固りであると信じてをる。子供は皆親の言ふことは正しいと思つて居る。親の命に隨ふのはそれに立戻ることである。哲學で智を愛するといふは自然に自分の根本に立立つて根本を愛好する心である。そう云ふものがエロスである。ギリシヤで哲學は驚異を以て始まるといつてゐる、これも皆様書物を御讀みになるとよくそう云つてあることで、プラトンの書物に、哲學は驚異即ちワンダーから始まると書いてある、そう譯せざるを得ないから、イギリス人の書物にも哲學はワンダーから始まると書いてある。この間も辞書を出してよくしらべて見ると、ワンダーと譯せられた元のギリシヤのタウマと云ふ語は、尊ぶと云ふ意味がある。ドイツ語ではホホハルテン、それは高く持ちあげることである。ワンダーではいけない、何か好奇心を以つて天地自然の現象に對し、驚くけれども驚歎と云つて何かそこに深ひものがある。好奇心と言ふものでない、驚くべき現象に對し分らんければ何か深い譯がなくてはならぬ。不可思議と言ふ様な暗示がある。

末開人の宗教と言ふものは我々の宗教と違ふ所もありませうが、然し根本は通ふ所があ

る。それは畏敬と言ふことで、畏敬の情と言ふものは末開人を通しての宗教的感情である、或は日月自然を遙拜する、或は高山祭神を遙拜する、或は太陽大日輪總てそう云ふ偉大な現象に對し、ドイツの言葉でエールフルフと言ふ情を發するエールは敬ふフルフトは畏れる。總ての恐怖は自分の生命體の危いときに起るのが恐怖である。畏敬と云ふのはそれとは違ふ、畏敬と言ふ意味が哲學で驚異を以つて始まるといふことの中に籠る譯で、神秘不可議の感情を持つ。不可思議と云ふは分らんと云ふことでない、只分らんと云ふのは眞暗がりであることである。神秘と言ふは判らんわけではなくして、判らんけれども、その奥底に何か偉ひものがある、それが神秘であらうと思ふ。假令ば深い淵がある、奥底が判らない、只のぞけば暗黒であるが、何かそこにあるものがある、そう云ふものが神秘である。人間自身神秘の感情を有つ、即ち理性の曙といつてもよい。其處を段々尋ねて這入る。好奇心でない。そこには深い奥にあるもの神秘の豫感、眞理は掴めないが、深い眞理があると云ふ一種の感情をもつ。日月の運行をみても山河草木の容姿を見ても深い譯がなくてはならぬ。それが表面に現れて居る譯でない、現象の奥に何かなくてはならぬ。それが即ち

敬愛である。子供にあつては親は智慧の固りである。特にそうは考へないが子供の心を推し測るとそう云ふ心持である。子供が段々心がつくと父と云ふものは世の中の總ての男子と云ふもを代表する。凡そ男と云ふと即ち自分の父親のことである。權威のあるは即ち自分の父親のことである。我が父親程偉ひものはない、それが子供心である。比較して思慮分別でそうするのでない、何んとはなしにそう感じてゐるのであるから、云はれる事に服従する。即ち子供から云へば親は智慧の固りで、小學校の子供から云へば先生は智慧の固りである。大人は赤子の心を失はずとは、我々は聖賢であるとか哲人であるとかそう云ふものを尊敬する。其の智慧をみんな得てをらないけれども、智慧があるとして尊敬する心である。それがなくなると聖人とか賢人とかそう云ふものが何者であるかと云ふ態度になる。段々そう云ふ傾向が著しくなると先生も尊敬しないのみならず、世の中の識者賢者聖人と云ふ者に對する尊敬心を失つて仕舞ふ。只己の判断でやつて行く、之は知識慾より進んで行くからそうなるのである。又教師も終にそんな考へになつて自學自習と云ふ事をよくやらせる。如何にも之はよい、教へこまず自分で考へさすこともしなければならぬが、

其の上に立つて指導する教師の智慧がなければならぬ。指導の下の自學自習ならばよいが文字通りの自學自習ではいけない。成長しても國の法を尊敬するとか、君主を尊敬するとかいふことがなくなる。聖賢と云ふものが眼中になくなると、自分の一量見で國法を私事すると云ふことになる。丁度子供で云へば親を敬することがなくなると同様である。國家は法則の場所であるとするとな國の原理は敬すると云ふことでなければならぬ。敬愛が國家の原理である。國家を敬愛する心でない、知れば知る程慢心が増長する、それが今日の有様の一面を語つてゐると云はねばならぬ。總へて文明が發達するとそう云ふ風になり勝ちである。文明が爛熟すると過ぎたるは及ばざるが如しで、そう云ふことになる。知る事を愛する所から知る事を知る。知る事を知るは何んであるか即ち智慧である。智慧とは何んであるか總ての知識の統一が智慧である。物理學或は心理學政治學其等のものを知識と云へば、そういふ知識の根本性質を知るのが智慧である。物理學者は物理學の知識をもつて居ると同時に、其の自分の専門の物理學が知識と云ふ一體系の中に於て如何なる種類のものであるか、其の種類範圍性質と云ふもを知らぬと、物理學知識が知識の總てである

如く思ふ。そうすると物理學者から無神論者が出る、宗教と科學は兩立しないと云ふ結論が出る。ニュートンの如き人は物理學の時期を劃したほどの人である。其の人が神を信仰したと云ふのは物理學と云ふものゝ知識がどう云ふものであるかと云ふことを知てゐる。自分の知る事を知つてゐる、自分の知識と云ふものはどう云ふものであると云ふ事を知つてゐるからである。假令ば徳山の町もこゝからみるとこゝ云ふ風に見える、あしこから見るとあんな風に見える。見る所に因つて違ふ、是は只一面のものである。知識は全體ではない、若し飛行機で遠方から見た時には、全體が見へるかも知れない、全體から観ればこゝうであるが、こゝから見ればこゝうであると、それ〴〵見る所を異にする。知慧と云ふものは所謂其の全體である。高所から全體を見下したのが知慧である。知識と云ふは一人の立場〴〵から物を見るのである。物理學は即ち、或一人の見地から物を見たのであつて、眞理の一面は擱へてをります。もつと狭くいへば太陽の入る時は太陽が地上から三間位の所、或は一間の所に下りてゐるといふのは、目に見た時は嘘でもなんでもなければ共、全體として太陽が地上一間位の所に下つたと判断すれば間違ひで、目に見た時

そうだといへば間違ひでないが、事實太陽が地上一間位の所にあるものといつたら間違ひである。物理學の知識も謂はばこゝういふものである。これを全體と思つて世の中を、總て物理學的知識で考へるのは丁度此の處から見て太陽が地上一間の處にあるから、實際太陽がこゝにあるとするに似たものである。知ることを知るといふのは、即ち色々の知識の性質を知り、知識の上に立つて一段上の處にある。それを稱して智慧と稱する。智慧と知識の立場を區別せねばならぬ、ギリシヤ人がフロソフィヤといつたのはこの智慧を愛することであります。キリスト教では智慧のことを敬虔と名づける或はこれを又神の崇敬、智の方から見た最上のもので前に申上げた母を通して神を知る。神とは即ち一切の智の根源である。神を崇敬する所から人間が智慧に達する、それで西洋中世の書物等は一番始めに先づ神に禱りが捧げてある。これから自分の皆様に述へる事がどうか神の力によつて間違ひない様に、自分の考へ、又自分の書く事が神の導きで間違ひの方に這入らない様にと、神に祈禱して書く。それから一番終りは今迄書いて來た事が幸ひ間違ひなかつた事をこゝに神に禱り。若し間違ひなかつたなれば何程か人の爲になりたいいひものである。それも神の力によ

ると書いて始めも終りも神に對する祈禱をしてゐる、祈りの心で考へ且つ書くのである。此の頃イギリスから出た或る雜誌に宗教と教育が一つでなくてはならぬ、大學教育は知識と云ふものが宗教と離れてはならぬ、其處で大學と教會とか提携しなくてはならぬ。そう云ふことを主張したものがあつた。元々イギリスの大學は宗教と教育と一つである。此間イギリスから歸つた先生からイギリスの大學はケンブリッジ・オックスフォード等それ／＼各カレッジにチャペルを持つてゐると聞いた。即ち大學といふは學校と教會を併せたものである。宗教を離れたものでない様に大學が建設せられてあります。それが何時とはなしに分れて大學では知識のもの許りになり勝て、それで元の主旨を徹底せしめ様といふ運動がある。宗教の神に對する崇敬、敬虔が學術と結合せねばならぬ。今の有様は學者知識者は何の爲に考へ何の爲に演説して何の爲に書物を書くかといへば、只自分等を發表するものである。俺はこういう研究をして居る俺はこう思つて居ると自己といふものを、世間に紹介する爲にいつたり書いたりして居る。總ての眞理は我が物でない、宇宙の眞理法でなくてはならぬ。神の眞理でなくてはならぬ。之を分相應に手に入れて世上に傳へ

る。どうか間違があつてはならぬとこういふ心で神の眞理を傳へなければならぬが、今日では自己を發表する爲となつて學問の墮落であるといふ意味の事が書いてある。神が一番智慧の根源である。子供からいへば親か根源であり生徒からいへば先生が根源である。其の智慧といふは何か理法を擱へ、總てを統一した根本的眞理をいふのである。慈によつて生命に參與する、又生命を生むといつてよいが、慧によつて理法を擱へる、或は理法と一つになる。その生命といふは即ち平等なものである。我々生命は體一杯に満ち／＼て頭に生命が固つてをらない。手足に固つてをらぬ。理法といふのは頭は頭の機能を營み心臓は心臓の運動をする。物の理法は即ち差別である。只生命といへば内容がない、内容をいへば即ち理法である。理法とは固つたものではない、生きて歩いてゐるものである。それを生命といふのである。吾々でも生理の理法が充分行はれると生命が活潑である。人間の心でも其の法に適つて働けば我々の精神生命も活潑である。生命の活潑である所には必ず理法といふものが行はれて居る。差別が正しければ眞に其平等を得る譯である。それは元に戻つていへば即ち出發點をいへば智と愛とは本一つである。先づ智と分けて御話すると主觀

は敬と愛であり、客観は理法と生命である。普通知識の對象として眞理といふ時には、何ものも感情を含まない事になる。それで物理学上の眞理は物理学で見た法則であります。それは敬といふ意味が加つて居らない。然し總ての眞理はこれを我々が遵奉すべきものである。己に法則といへばこれを遵奉すべきである。敬といふ意味が加らないと只知識の對象となるから、眞理といふ事が實行とはなれぬ。法則といふは己に遵奉すべきことである。眞理は即ち我々の實行の規範になるのである。理法とか法則とかいへばこれが知行の合一したものである。知育丈で徳育が足らぬといふのは、畢竟敬がないからである。實は知育でよい、眞理を知れば眞理程尊いものはないのだから、知つた以上は必要に應じて其の通り實行しなければならぬ。そうすれば眞理は即ちそのまゝ法則となる。本來の智育になるのである。それで主観と客観と兩方合せなくてはならぬ。法則を尊敬するといふことになる。法則といふ側と、それに對して尊敬といふ側とこの二つに別れることになる。元來尊敬すべきものでなくては法則でない、敬ふ所のものが法則である。法則とは即ち我々の尊敬すべきものである。眞理を尊敬するといふところから出發すれば、眞理に達すると同時に、我が

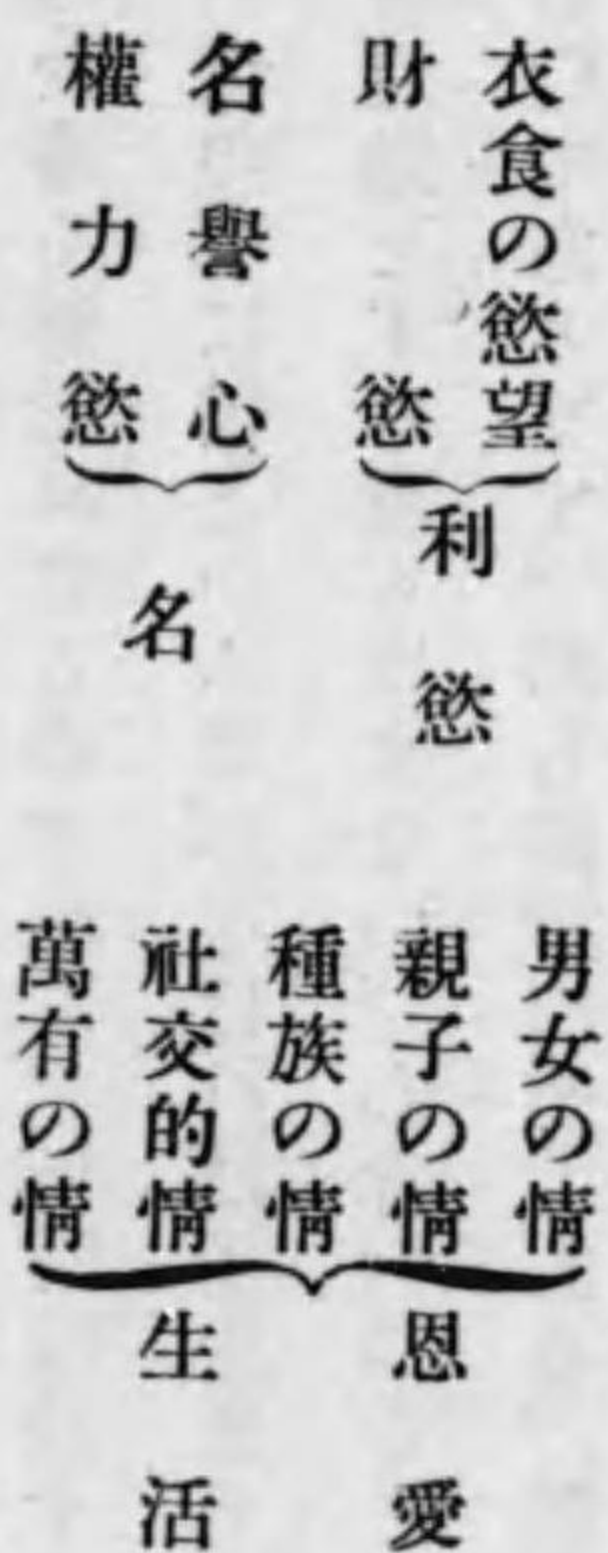
身に及ばざるを得ないことになる。物理の法則でありましてもそうなる、然るに前に申し上げた様に石につまづき石をよけて通らなければならぬといふことは、只知識から見れば自然の法則に過ぎない。それをよけた方が利益といつて利害に訴へると、道德の問題でも正直であつた方が得だ、偽をいふより正直にした方が良い、世間の道德を守つた方が利がある、といふように、總べて利害から來なければならぬことになる。況や自然の法といふものはこれ利用するにあるとする。物理学も化学もこれを利用するといふこととなるのは、畢竟出發點が知慾から來るからである。尊敬するものであつたなら、得た以上はそれに遵ふ、自分の敬がこもつて居るから總ての眞理は皆守るべき法則ならざるはない。そういふ點から理法とか法則とかいふものは眞理と變らないが、それには主観的感情が離れないものである。主客双方合せたもので智と行と一緒になつたものである。物理の世界を究むる知識は物理的法則を捉へ、心理現象を究める知識は心理的法則を捉へる。これらは特殊の知識特殊の方から見たものであるから、それを統一したものが倫理の知識であつて、これ等知識の外にあるものでなく、これらの知識の意義を知るにあるのである。物理的法則は根本に於

ては如何なる意義を持つて居るか、真理全體の上からどういふ地位を占めてゐるかを知るのである。これは統一の知識所謂これを智慧と稱する。法則を遵奉する感情が加つたものである。尊敬して之を實行するから倫理であつて、心身一つなるものである。實行して行く只の知識は、對象で知るものと、知られる方と別れて居る。倫理は知つたものと知られたものが一體となつて来る、倫理の法則は心身一なるものでなければならぬ。特殊知識を倫理に應用するときには人生を全うする事が出来る。それを具體的に現したものが國家の組織で、國家といふものは道德の實現者である。國家を組織しないと、道德が實際にならない。世の中で道德が行なはれるといふことは今日の國家を存して居るといふ事で、末開人に完全な道德がないといふのは、只群をなしてゐるが、法と言ふものが立たないからである。法と組織といふものが立つたなら、國家を組織して其の中に道德が起る。國家と國家との交際即ち國際的交りは、十分に道德的でない。國際關係は今日でも力の關係がある、一部分道德を以つて交るが、完全の道德が行はれ得ないのである。このことは後に委しく申しますが、倫理はつまり心身一なるもの、それが人生を全ふする事になる。我々は身と心を

一にすれば、只自分の心の内に思ふばかりでなく、衆人の眼前に現はれて、客觀的になる。思つた事を口に言ふ、言つた事を實行する、内外打ち通してなるから社會的のものになる。心に思つて居る事が身に現れねばならぬ。公のものにならなければならぬ。内と外と齟齬して居て、心に思つて居るが、口には別の事を言ふ、しかもその通り行はない。總て内と外と齟齬するのが私事である。信とは言行一致したものである。信によつて世の中が成り立つのである。如何に道德を否定するものでも、心の底には信を持つて居る。力の外に道德がないと主張する社會主義でも矢張り人間の信といふ事を豫想して居る。そうしないと自分の言つた事も無駄になるのである。何時演説すると言へば集ると思つて居る。それが信である。世の中に信といふ事がなければ手も足も出ない。社會主義を主張する事も出来ない。社會運動をする事も出来ない。心身一つそこで人生を全ふする。皆の者が合一したものとあるのであります。即ち國家組織である。社會の凡有方面を合一したものは國家の外にない。國際合一と言ふものは或は宗教の會議であるとか、技術の集りとか、赤十字の會合であるとか、生活の一方面丈であつて、内も外も生活を残らず統一したものは、國家よ

り外にない。それで

心理



世間の總てが名利恩愛である。衣食を欲する、財産を欲する、名譽を欲する、權力を欲する、恩愛生活は社會的の生活である。それに對して知慾といふものがある。愛慾は我々の心からいつたものであるが、つまりは我々の身體に關係してゐる、名譽金慾皆身體に關係がある。名譽でも我々の顔を汚す面目を傷つける、即ち我々の顔といふものに關係がある。名譽といふ事は自分の顔を高く見て貰う事である。立派な勳章をつけると、顔と勳章を比べなければならぬ。顔を包んで勳章をつけても何もならない。錦をつけて暗闇を歩いてもつまらない。白晝往來の人の見る所に勳章をさげる。これが名譽で、即ちこれが身體

に關係がある。直接關係がない様であるが、身體をとつてしまへば、何の慾でもなくなる。男女の慾皆我々の體に備つてゐる。顔を見れば直ぐに種族の感情が起る。又人間と人間以外のものを區別して、人間の顔をみると一種の感情が起る。それが人類の感情である。又萬有の情とは、花を見て楽しむとか、景色を喜ぶとか、風が吹いても、雨が降つても、皆人間が感情といふものを起す。皆我々の體と萬物共通一切のものがあるからである。そこで春になれば我々の體に影響して、春の様な感情になる。秋になれば萬物が靜になる。總て我々内面に起る事で、體の關係のないものは一つもない。この方からいへば體から色々な事が起るといつてよい。知るといふも目で見て知る、體といふものを通して知るのである。衣食財は物の世界に屬する。名譽地位は矢張り外のものである。名譽といふものは、世間のものである。人がよく言ふ、よく思ふ、思ふ許りではない現さねばならぬ。勳章なら勳章は物質であるが、人が尊敬する。それを褒める。言葉に表す物質世界である。地位もそうである。校長の椅子に座るとか、社會の地位とか、社會上に現はれたものである。みんな物の世界である。優勝旗であるとか、カップであるとか、物質的なものである。ど

うして作るか物理の法則に随つて作るものである。男女親子種族みんな形に現れたものである。廣く言へば萬有である。内に衣食の慾があると、必ず外に衣食がある。外の衣食といふは内に衣食の慾のあると相應してをる。金を重寶がるといふも、慾がなければならぬ。犬猫には金が寶でない。日本人は米を食はないといふなれば、これは財物にならない。これらの雜草と米と只の物質の世界のものであります。雜草は食べられない、米は食られることによつて、米は財物となる。内外相應したもので、單獨のものでない。その中間は體であり體は半ば外、半ば内のものである。名譽心に應じて名譽がある。勳章なんか何んでもないと思ふ人には勳章があつても有難くも何でもない。邪魔ものである。欲しい人にはそれが非常によい。内に欲するところがあるから外には名譽がある。總て内外相應したもので、假令男女があつても、男女の情がなければ男女といはれない。その感情があるによつて、男女がはつきりして居る。男女がなければ、男女の情といふことはない。男女の情を矢つたものは、無頓着なものである。顔が違ふ丈のものである。親子の情があればこそ、そこに親子といふ事になる。親子の情がなければ、只他人と變つたことはない。路傍の人

と變つたことはない。親子の情があるといふことも、親子があるからである。内外一致したものである、この事をよく考へねばならぬ。日本人の顔を見ると、一種の情が起る。起るから日本人になる。途中逢つても何の感じも起らねば、日本人も西洋人も何の變りもない。我が同國人であるといふ事を知る。そうなるのは日本人的感情がそうさせるのである。同時に日本人でなければそう感じが起らない。人類的感じといふことも、長い間沙漠を旅行して、久しい人間に逢はなかつた者が久し振りに人間の顔を見たといふ時に起つて來る。人間として社交性感情がなければ、形が違つたものが動いて居る丈である。特別の違はない。又一方から言へば、人類が居ればこそさういふ感じが起る。次に又萬有の情から、如何にも月は月、風は風とする、萬有に對する感じを失ふと、月が出てても風が吹いても、何の變りもない。只丸切り物質になつてしまふ。或は風を怖れる、或は風を愛する、適當に風が吹けば快い、夏吹けば涼しい、清涼な風である。暴風が來れば人間を害する。さういふ喜怒哀樂の感情の對照となる。風が我々にとつて大切なものである。それでなければ吹いても吹かんでも變りはない。害にもならないといふと同じである。人間の情といふものか

ら、風といふものは、我々にとつて生き／＼したもので、風の如きすら、そうである。況んや國土草木我々に皆直接關係をもつて居る。或は我々を利し、或時は喜ばせ、人間の性質と離すことは出来ないことになつて居る。之が即ち自然界である。

儲衣食財物が足りるのが、其方面の倫理である。經濟といふのがそれで、充實すると其慾望を十分に満すことが出来る。次に名譽の倫理は名分であり威徳である。威徳とは不動の如き、大威徳である、明王の力といふは暴力でない、道徳から起るものである。本當の威といふものは、それでなければならぬ。國には國の威がある。君主には君主の威がある。教師には教師の威がある。親には親の威がある。威といふものは、正しい善なものでなければ、威でないのである。それでなければ押へつけるものである。道徳の世界、倫理の世界では、威徳を欠いてはいけない。そうでないと人が侮る。教師に威がなければ生徒が侮る。親に威がなければ子が蔑にする。建國は威の基で、國に威がなければ外國が侮る。君主に威勢がなければ、群衆が侮る。權力を怖れるのではない。道徳の力である。これが即ち立法政治となるのである。夫婦和し……父子親愛……忠君愛國……人道信義……慈愛……

萬有の情等皆それ／＼倫理である。人類愛といへば人類以外のものは愛せない様に聞えるが。博愛・平等・人類愛といふさういふ愛は、廣い様だけれど、矢張り草木鳥獸をも愛するのでなければならぬ。慈愛といふますと、矢張り花を愛する。月に對し花に對し、感情をもつ。草木の凋落を悲しみ、花が開いた技が榮へたを善ぶのは、慈愛である。慈愛といふはこれ等をも、こめるのである。人類許り愛するといふ事になれば、草木鳥獸はどうするのであるか、慈愛の心は廣いものである。子に對し子を慈しむ。教子に對しては教子を慈しむ。同國人に對しては同國人を慈しむ。總てを慈しむ。萬物を慈しむ。平等のものであるから慈愛である。眞に結構なものである。時代に從つて言葉を用ふれば、強ち排斥するに及ばないが、人類愛の言葉は人類に限る様に聞へるから誤解を生む。慈といふものと生命と合一する。生命は客觀的である。慈は主觀的である。主觀と客觀と一緒になり、慈と生命と合一したものが即ち善である。内外一致したものが始めて善といふ事が出来る。それでない、外のものを求める。外のものを求めるのは自然の慾の事で、男女慾種族親子の本能等である。これと夫婦の道、慈孝・忠君愛國と混同してはならぬ。自然の愛慾は倫理

ではない。イギリスのラッセルといふ人は、愛國心の功過といふことを論じてゐる。愛國心といふ事は、良いこともあれば悪いこともある。良いといふのは一面個人主義を捨て、しまし愛國心である。悪いといふのは、總てが自分の國丈けのことを考へて、世界に覇を唱へようと、侵略主義で世界平和を攪乱する愛國心であるといふのである。是は只自然を知つて、倫理を知らない。末だ忠君愛國の真相を知らないものといはなければならぬ。眞の愛國心は、そといふ本能的愛國心ではないのである。丁度父子の道といふは、本能的親子の感情でない。夫婦の情誼は本能的男女の情慾ではない。忠君愛國といへば人道に逆はない、自分の君主に對して忠なるもの、そといふものが人の國を傷ける筈はない。自分の親を大切にすることが、人の親の頭をはるといふことはない。我が親を大事にするものは、矢張り人の親を大事にする。自分の親の事は考へるが、人の親の事はかまはないなら、それを孝行とは言はない。外の國を踏み仆して、我が國の利益許りをはかるならそれは忠君愛國ではない、國家主義と、人道主義と、衝突する様に考へて、國家至上主義は、人道とは別のものであるといふ風に考へる者がある。

次に人間の慾はすべて知慾で代表させることが出来る。愛慾で代表させることが出来ると同じである。知るといふことを離れては愛することも出来ぬ。知るから愛する。知らないと愛することが出来ない。欲することは知らう／＼と欲するのであるから、假令ば衣食の慾は何であるか、石や砂の如き味ひのない物は味はない、味覺のあるものを味ふのである。身に感ずることを求めてゐる、名譽であらうが地位であらうが總てそうである。人がよくいつて呉れると思ふこと、それが愉快なのである。財産があるといつても、いくら澤山有つても自分で知らねば寶でも何でもない。自分の所に倉が幾つあつて、それに寶がどれ丈あると承知してゐるから愉快なのである。分らん事を求めるといふことはない。總て愛といふものは知を求めて居る。我が身に感じ我身に知ることを皆求めて居る。知と愛は裏表の様なものである。

法則とは畢竟何んであるか、善が慈愛と生命の合一ならば、又之を智慧と法則の合一といふことも出来る。道德も一方からいへば生命である。一方から言へば總て法則であるといつてよい。それで教を立てるものは或は仁を説き、或は義を説く、義は法則で、仁は即ち

生命慈愛の方である。或は人道正義ともいふ。人道とは西洋では人情といふ意である。眞理といふと客觀的、智慧といふと主觀的である。眞理といふものを敬へば、我が身に誓ふべき導奉すべき法則となる。眞理の外に正義といふものはない。其の内容は何んであるかといへば、生命と法則之を統一したものが即ち善である。此の善を具體的に現したものが國家である、國家に於ては總ての知識を備へなければならぬ。國家組織には、凡ゆる知識がはいつて居る。物理の法則、生理の法則、心理の法則、皆備はつて居る。假令ば遞信省鐵道省これらのものは、物理を主として物理の知識を備へてゐる。農林省商工省は生物の世界、物理の世界を知らねばならねばならぬ。此等の凡ゆる知識を統一しないと國の法が立たない。又國家の中に於てさういふ知識が起つてくる。國家を持たないと外國から知識が入つて來ない。自分に文明を持つて居らないと、我々は他の文明と交る事が出來ない。我々は國家を持つて居るから、そこで文明を交換することが出来る。總てを統一した國家といふものは、法の府である。法は即ち知によつて知る。知るといふのは、人間の眞理を尊敬する心から出たものである。從て國といふは、敬といふ事が根本で、法を敬ふといふことでなけ

れば國が成立しない。敬ふ心がなくなつて法丈け残ると國は只表面的に結合するといふことになる。國を活す所のものは、法を尊敬するといふことでなければならぬ。日本の道德でいへば忠といふ事になる。國家には立法といふことがなければならぬ。社會の法的組織之を國家と稱する。法則の本は萬物を知らねば分らない。即ち立法が出來ない。内容をいへば總ての法則を要する。農林省に一の法令を作るには生物界の事を知らねばならぬ。それなしには作ることは出來ない。鐵道省に一つの法令を作るには、械機の學問、工學、土木の知識なくして、作ることは出來ない。それ等らの知識を現はしてはゐないが法の根底には總ての法則といふものを統一してゐなければならぬのであるから、國家とは即ち社會の法的組織であつて、衆理といふものを統一したものが法である。其の法によつて社會生活を享有する所に、始めて國家といふものが成立する。社會を法的に組織するに、立法行爲者がなければならぬ。所謂立法者がなければならぬ。其の立法者が即ち君主である。立法者は立法機關のことでない。立法機關といふのは立法者が設けたものである。立法させる道具を立てる所の立法者がなければ、立法機關は出來ない。立法者とい

ふことは、之は大事なことである。立法者の一番大事なことは何であるか、超法者でなければならぬといふことである。立法者は總ての法則を超越したものである。國の法に對して責任を持たない、それが即ち法を超越するのである。法の下にあるものは一國の臣民で、之は法を超える事が出来ない。法を設けるものは法を越える。法を越えなければ法を立てることが出来ない。法は動いて行くものである。成長發展して行くものである。現在の法の固りが立法者ではない、立法者は法といふものを提げて成長させてゆかねばならぬ。それについては現代の法といふものを統一する、即ち法を産むものは、産んだところの法全體よりも上のものである。其の統一の下にあるものは、法のある限り何處までも其の法に従はねばならぬ。法を立てるものは内容に應じて法を改善する、改廢することが出来る。それに責任をもたぬといふのは、無責任といふ任意勝手のどうでもよいといふのではない。法全體は改廢することの出来る生きたものであると言ふのである。假令は我が體は一つの細胞であつたとする。その細胞といふものから體が成長發展して來たが、その細胞の力といふものは、現在の組織全體を越へたものである。それに束縛せられたら、これ以上伸び

ることが出来ない。之を越へてそして太つて行く。段々大きくなつてゆく。それ許りでなく、一個人としても同じである。立法者といふものは、即ち國の生命を代表して居るのである。現在の構造機能によつて生ずる本は、現在の構造といふものを何時も超越して居る。そのことが先づ理解し難い、物の前後左右の關係を明にするのが、即ち物を理解するといふ事である。現れるまでは、形のないものを作るといふ力は理解することが出来ない。藝術でも出來上つたものは、バランスが取れて居る。色が調和して居る。作つた藝術家の心はそれに束縛せられて居らない。どんなものが出来るか、どんな風に發展するか、不可思議な力を持つて居る。即ち我々普通の意味で理解する事が出来ない。立法者が即ちどういふ風にそれが發展してゆくか、我が國體の根本は變らないが、公卿が實際政治をやつた時代もあるし、武人が實際政治をやつた時代もある。色々の變遷がある。又今日は變つて居る。しかし國の根本は動かない。國の眞の重心は今も昔も變つたことはない。今日とても、これで濟む譯でない。將來どういふ風に發展するか、それが國が活きてゐるといふことで、立法者の超越性による。國家論といふもので一番理解し難い點である。西洋でそういふ超

越性を論じたものが、ヘーゲルの國家論にある。自分の事柄でも將來どういふ風に發展するか分らぬ。學校の子供も今出來が悪いが、將來どういふ風に發展するか、悪くなるものもあるが、良くなるものもある。高等専門學校を卒業するとき悪くても、社會に出てどういふ働きをするか、計り知れざるものがある。しかし根本が崩れるといふことはない。底力といふものは、普通の力で理解することは出來ない。立法者は産むものでなければならぬ。國の親でなくてはならぬといふ意味がある。

前にも申ました通り、生活の全體は感情と知識、生命と法則である。即ち本能といへば愛慾と知慾である。その愛慾といふものは、根本は慈愛である。慈愛とは即ち生命だから、慈悲の教へは總てのものを生かすといふこと、法則の方は智慧即ち生活の全體の統一で、具體的にいひますれば國家の組織である。國家は慈と慧とを以つて基とする、生命と法則といふものを離さないやうにする。それを一つにしたものが國家でなければならぬ。國家の組織は内面をいへば慈悲と智慧をもつて治めて行く。外に對して國民の生命を全ふする。そうすると、其國の法則がよく行はれるといふ事になる。して見ると國家の主體といふもの

は慈と智慧を備へたものでなければならぬ。慈悲を備へたものを之を有徳といふ。有徳であつて而して智慧を備へたものである。即ち法を設けるもの、そういふ者を支那でいふと聖人といつてゐる。一國の主體は聖人でなければならぬ。支那の理想でいへば堯舜である、堯舜は智慧の固りである、而して慈愛の固りである、それが理想であつた。又ギリシヤの立法者は皆賢人である。徳を備へた者である。哲人聖賢が有徳であつてそして智慧を備へてゐるものが國家の主體で、具體的に云へば君主である。之が國家の理想で、治める者が所謂徳治、又法を以つて治めるものを法治といふ。後世は法治と徳治との區別をするやうになつた。支那でも所謂法家といふものが出た。昔は徳と法が離れなかつたが、後には只法を以つて治める、そういふ國家思想が支那にも起つて來た。そこで法家といふものが出て來たのである。西洋でも昔は徳治、ギリシヤの國家論は徳をもつて治める。哲人と云ふは智慧のある者をいふ。支那でも徳惟善政と云ふ事がある。ギリシヤでは國を治めるのは即ち哲人の政治であるといつてゐる。西洋でもギリシヤの昔は所謂只法を以つて治めると云ふだけのものではなかつた。徳治といふものは法治を除けたものであるかといへばそうでない。

徳治と云ふものを排斥して法治と云ふものを考へたから、それで別のものと云ふのである。元來徳惟善政、總べて政といへば所謂禮樂刑政の組織を設けないと國は治らない、徳といふものがあつてそれから法が出てこねばならぬ。法を以つて治めると云ふは矢張り徳治の中にもこもつてゐるのであるから、孟子にも舜のことを色々云つてゐるが、舜法を天下になすといふ、その天下になすといふは、即ち禮樂刑政の組織によつて國家を立てるといふ事である。舜が徳を以つて治めた事が色々述べてあります、同時に法を天下になすといつてゐるのであるから、徳治と法治は元來對立すべきものでない。二つのものは元來一つである。それを徳といふものをのけて法だけで治める。といふ考が出て來たのであつて、日本でも大隈侯爵が徳治といふものを排斥されたのである。法治でなければならぬといつたのである。我國の立憲といふものは法の背後に天皇のお徳といふものがある。理解丈で政治をしてゐるのでない、其根本がある。それが即ち天子の徳である。徳が背後になければ法丈けの政治は只機械的のもので、表面丈け統一することになる。それで儒教といふものは、佛教であるとか或はキリスト教であるとかの様に只心を修めるだけの學問でない。所

謂身を修め國を治め人を治める。心を修めるのみならず人を治める所の學問であります。今日の言葉でいへば儒教といふは政治哲學である。儒教の政治哲學といふものは、理論に於て却々完備したものである。此の思想は昔時日本等に早く入つたのでありますが、文化の交通ができるやうになつて近世歐羅巴に這入つてゐる。先づフランスに入りました。どうして入つたかといふに、フランスの宣教師が支那を教化しやうとして入つたのでありますが、反對に支那の思想に化せられたのであります。支那は入つてくるものは皆化する。政治的には支那を統一してゐる色々な民族が、政治上勢力を得て、文化の上から言へば、入つて來たものを反つて逆様に感化する。今日でもイギリス人アメリカ人等が入つてゐるがアメリカ人等は餘程勢こんでキリスト教で感化しようといふ考があるが、却々そう行かない。イギリス人等は永く住つてゐるが何時の間にか支那に化せられる。支那の國の建て方といふものを賞める様になつてゐる。今迄そういうことを書いた書物がある、四千年國が續いてゐる。そういう國が西洋の方にはありません。皆亡んでしまつてゐる。支那はどうして永く續くか、支那といふ國は徳といふものが根本になつてゐる。フランス宣教師が支

那の哲學は餘程完備したものであるとした。明の時代清の初めに孔子の教を研究して、世界で此程完備した政治哲學はないとして、儒教の政治哲學を書いて本國に紹介したのである。ところが問題を起して、支那に宣教に出掛けて支那の教を禮讚する。等とは何事ぞと。ローマ法皇廳で問題が起つた。段々究明して見るとそう言ふ譯でない、フランスはそれで漢學研究では歐羅巴一番といふことになつゐる。儒教といふものはつまり倫理學であつて而して國家學である。西洋では倫理學と國家學が別れてゐる。法律と道德とが分れてゐる。昔はそうでない。ギリシヤの國家學が即ち倫理學であつた。それで近世でも法といふものと徳といふものを離してはならないといふ考への人がある。併し法の哲學といふものを書いてそれが即ち倫理學であるといつてゐる。慨していへばそれを別けるそこから今の法治徳治といふ區別を立てる様になつた。先日から申上げたやうに敬愛は一つである、人情と知識といふものは元來一心から起つたもので別のものでない。生命が盛んであれば法則がよく行はれる、法則が行はれば生命も盛んである。之は別けてならない、國家の主體は即ち慈を備へ慧を備へる。ここから出る政治は道德であつて同時に法治でなければなら

ぬ。論語では孔子は仁とこふことをいつてゐるけれども仁ばかりでない。論語をみると禮といふことをいつてゐる。禮といふのは即ち國家の組織の事をいふのであります。丁度支那で禮といふのを獨乙人がレヒトといつてゐる。之は同じ事である。支那の禮の細かい事を所謂曲禮といひます。支那の學問は一方からいへば禮の學問である。周禮と云ふ書は國家の理想を述べたものである。社會の總ての法則で、經禮を述べたもの、周の國家組織を述べたものである。實際の組織であつたか、或は理想化したものであつたかそれは分らない、然し實際あつたものを述べたと云ふよりも理想化したものであらうが、まるでユートピヤではない、事實行はれてゐたものを完全に述べたものであらう。プラトンの理想國も矢張り理想であるが、丸切り架空に書いたものでない。當時ギリシヤのスパルタとかアデンスとかに行はれたものを根本にして書いたものである。述べ方が違つてゐるが周禮は即ち國家論である。孔子の學問といふものは、禮といふものがあるが、一方では仁といふ事がある。其仁とは即ち總ての生命の本である。禮とは法則の方である。此二つが論語に備つてゐる。孔子は仁を説き、孟子はそれに義を加へて仁義を説いた。然し孔子は禮を説かれ

てゐる。義と云ふものは禮より主觀的に云つたものである。法的組織と云ふのは即ち立法である。立法と云ふものが行政の根本である。先づ法によつて組織する其法といふものを運轉して行くものが行政である。國家は法によつて社會を組織せるもの、人間の生活の凡有ものを含んでゐる。人間の愛慾といふものは、衣食住を始めとして總てのものを皆我々慾望の對象としてゐる。衣食住といふ丈けでも萬物を相手にしてゐる。國土草木鳥獸さういふものがありまさんと我々は生活することが出来ない。人間の生活を完全にしてゐくには國土を治める、山河草木を正しくしなければならぬ。そこで政治と云ふものはそれに皆關係してゐる只地上許りでない、地上の事は天上に關係してゐる。それで政治の對象といふものは陰陽五行只地上許りでない、日月の運行が時を誤るといふことはない。政治の根本は先づ天の時を定めるのにある。餘り根本的であるから氣がつかない。政治の一番初めを考へると時が一番初めである。尙書を見ると堯帝の政治の始めに曆を作ると云ふのが書いてある。禽獸の生活と我々の生活と違ふ所は時を定めてゐることである。今日は何年何月何日であるといふやうに時が定らないと、我々の社會的生活が出来ない。時が定まつてそれ

で全體的活動が出来ると、何月何日會合する何時から講習會が始まる、自分獨で暮すならば時は要らないが、先づ我々の生活は時を定めると云ふことから始まるのである。それで天下を治めることを、曆を天下に領つとも云つた。周の時代には周の曆、殷には殷の曆がある、今日でも何んの曆であるとか國によつて曆が違ふ。天子の命を奉ずることを正朔を奉ずると云ふことが書いてある。今日は太陽曆になつてゐるから太陽曆を奉ずる、我國民は我國の始めから何年目になるといふべきである。便宜からくることではあるが、一九三〇年と云ふやうに記すべきものでない。それは國際的には必要であらうが、二五九〇年と我が國の紀元を用ふるべきである。支那から來てゐる學生でも中華民國何年と書く。それが即ち國家の法治の下にあると云ふことである。之は形式的のことであるが然かし形式に意味がある、であるから政治は只地上許りでなく地上と云ふことは天上に關係がある。天地に位する、そして國土を治める。海の事も山の事も政治に關係しないものはない。それを整なへないと國民が生活することが出来ない。それがないと種々の便がなくなる。灌漑の便がなくなり、魚類が繁殖しないのみならず、雨が降れば洪水になる。そこで國は山をも

つて本とすると熊澤蕃山は云つてゐる。山が茂つてゐればそれで國家の基礎が出来ると言つた。奥山に草木が茂つてゐると度々夕立がある。山の奥に木がなくなると夕立がなくなり、ひからびてしまふ。すべて天文地理の學問に通ぜねばならぬ。所謂天地の理法を知らねばならぬ。草木鳥獸のことを調べ、有害の草は取つてしまふ。有益の食物はどうしたなら、繁殖するか、どういふ虫か害を爲すか、どういふ鳥獸はどんな生活をするか、繁殖するか、農業も牧畜も、皆動植物の學問の研究によらねばならぬ。それから心のことは心の學問である心理學によらねばならぬ。そこで物理、生理、心理、總ての理法に通じなければ生活全體を統一する所の法則といふものが成り立たない。

そこで國といふものは法の府であるといつてよい。法則といふものは直ぐに學術として出てゐないが學術を豫想してゐる。學術が進むに従つて法といふもの法規といふものは變つて行く、總ての法といふものは學術上の智識といふものを待つ、そつといふ譯であるから人間の生活を全ふするには萬物を全ふしなければならぬ。斯ふいふ事は實際に於て今も昔も又我國であつても他の國であつても同じであります。西洋でも無論法の中に萬物をこ

めてをります。西洋の事は物の區別が甚しい、人間といふものを特別偉いものにしてゐる。萬物に對する慈愛といふ事の教が少ない、佛教とキリスト教とに比べると餘程それがあつた。佛教のキリスト教に勝つてゐるのは人間許りでなく地上凡有物に對して廣大な慈悲を説く。耶蘇教に其の精神がない事はないが人間本位である。然し人間の生活といふものは萬物に取りこまれてゐて、其の中の極く僅の部分である。そこで生活全體を統一しようといふ國の法といふものは、凡有學術といふものを持たねばならぬ。つまり智慧の固りともならねばならぬのであるから國を治める國家の要諦は、智慧の固りで、君主は哲人であり聖人でなければならぬ。斯ふいふ考へが正しい考へといはねばならぬ。それを一個人が治めるにしても、又少數が國體となつてギリシャの貴族政治の様になつても、何れも國家の上に秩序が立つて行かねばならぬ。従つて法によつて統一せられるものは残らずのものである。其の生活の残らずの方面を統一したものが國家である。今日は社會といふ事をよくいふが社會學といふは社會を根本にしてゐる。國家といふは社會の一種で社會には色々の社會がある。人種的の社會、國際的の社會といふ大きなものもある。又學術丈で集つて

ある社會もあり、生産の團體なれば生産組合消費組合之も社會、宗教團體之も社會、其の中で學校も一種の社會である。社會が一番大きなものであると考へてゐる。之はどうして
 面白いふ考へになるかといふと、色々の原因がある。殊に西洋には面白いふ考へが起る譯
 がある。それは其の西洋民族の生れつき又生立ち其の生活の歴史といふものから、自然そ
 ういふ風になつたのである。我々の如きは社會といふことはいはなかつた。今日は社會奉
 仕と云ふ徳目が必要となつて來たが、從來は社會奉仕がなかつたかといへば全くなかつた
 のではない、社會奉仕といふことをいはずに濟んだ。何故濟んだかといへば今日はこうい
 ふ大勢の集りが必要となつて來て、日本でもこういふ公開の場所といふものの必要を感ず
 るやうになつて來た。併し從來はそれが要らなかつたから、公會場はなかつたが、今は大
 いに必要となつて來て、已むを得ぬ時は寺とか學校とかを利用するといふ風で多數の者が
 集る必要が起つて來た。こゝが即ち社會生活の發達である。面白いふ意味の社會生活が
 從來我が國は發達してゐなかつた、其の必要がなかつたのである。家族から少くとも學
 校位ですんだ、面白いふ民衆的生活大衆的生活といふものは我が國では最近の發達であ

る。それで公德心が日本には缺けてゐるといふが、日本人に缺點があるのではない、是は
 社會的生活の結果であつて、日本人に徳義心が薄いといふ譯ではない、習慣から來るので
 ある。それからして今日社會奉仕或は公民道德、公民教育といふことが唱へられるが、公民
 といふは個人／＼が個人であるとか町村であるとか府縣であるとか公の事に直接關係する
 様になつて來たからのことである。只自分／＼の職業を營むときは教師は教師の仕事、農
 家は農家の仕事をする。其の職業は無論國家の全體の事で其の職を勤めることによつて全
 體の爲めにはなるが、同時に自分の世渡りである。個人／＼世に立つ所以である。公民と
 いふものはそれらに拘らず教師であらうが商人であらうが選舉には皆同じ様に携らなけれ
 ばならぬ。公の事に關係する様になつて公民教育といふ必要が起つて來たのである。社會
 奉仕の徳目も起つた。西洋では社會といふ事を多く言ふ、色々社會思想の中には我々の消
 費組合の様なものゝ國家と認める。國家といふものを消費組合と認め、消費者の團體が國
 家である。生産は國家以外のものであると面白いふ思想すらある。無論學術文藝宗教とい
 ふものは國家の範圍外と考へてゐる。面白いふものでないにしても普通國家の考へをもつ

てゐるものであつても、學術は國の境を越ゆるものであるとか、宗教は社會的のものであるとか、或は藝術でもそうであるとか、國家の範圍外であると云ふ考へは却々である。然し事實を見ると社會と云ふものは生活の總ての方面を統一したものは一つもない。國家の中に色々社會があるがそれは特殊の方面丈けによつて出來たものである、學校も一つの社會であらうがそれは教育と云ふ事で出來た、教育で集つたものである。教會は宗教生活のことで外に關係したものでない。或は實業の事でもそれである。皆國家の中のどの社會を取つて來ても生活の或る方面丈けを中心として出來たものが社會であるが、國際的にはどうであるか之はなほ限られてゐるのである。今日の宗教等も國際的宗教は難しい。宗教家が宗教と云ふものは人道的社會である、國家と云ふものは其の國に限られてゐる、かう云ふ事を云ふが實際は必ずしもそうでない。宗教と云ふものが却つて人道的の考へを妨げてゐる大なるものである。宗教が違ふと云ふ事が人間の争の元となる。現在印度の統一を妨げてゐるのはマホメット教と印度教で、宗教を異にしてゐるから印度人が結合してイギリスに反對する事が出來ない。反英運動が起つてゐる様であるが印度自身の宗教の違ひから

反目してゐるから、國民全體が一致してイギリス人に對抗する事が出來ない。それが弱點である。イギリス人は弱點を擱へて兩方を喧嘩させようとしてゐる。世界平和を守るキリスト教は、キリスト教で新教と舊教に分れて鎬を削つてゐる血を流した歴史がある。異教徒位悪いものはない、我が宗教に従はざるものは悪魔であるとする。今日も宗教が違ふと云ふ事が世界平和の邪魔になつてゐる。宗教が人道を創設したとは云はれない。國家の方が人道の元である。人道と云ふ考へは何處から起つたか、宗教から起つたものでない。國家の中から人道といふ事が起つてゐる。支那の昔から四海兄弟といふ事があるが國際的生活を營んでそれから起つたのでない、支那民族の中からさういふ考へが出た。地上に生れたものは皆兄弟である。人は我同胞、物は我與と張子厚がいつた。草木禽獸も我同類であるとする。佛教を受けて出來たものでもなければキリスト教でもなく、純然たる支那の内面からのものである。ローマにもキリスト教の影響を受けない前からさう云ふ考へが起つてゐる。又ユダヤにも、内地人にも外人にも、法は一なりといつてをるそれが即ち人道的思想である。勿論宗教が人道を鼓吹したと云ふ事もある、同時に宗教によらず國から起つ

た事もある。我國の教へも一つの宗教である。それであるから今國際的社會と云ふ風な考へで假令へ萬國で宗教の會議をやるとしても、佛教マホメット、キリスト等宗教の異つたものが一堂に會して一致點を見出すことはむつかしい。學術協會はあるが精神科學の協會は未だない。支那の文明日本の文明それが一堂に會して肝膽を吐露して一致點を見出すことも出来ない。物理學生物學については萬國の學者が一堂に會することが出来る。之は西洋の學問を採用するからである。醫學でも漢法醫もある、我國にも皇漢醫學と云ふものがある。徳川時代の日本獨特の治療法が入つてゐる、そう云ふ皇漢醫學と西洋の醫學と一堂に會して話をするそれはむつかしい。萬國の學術協會が出来るのも西洋の學術と云ふものを統一せられるから出来る。國々の特色をもつた會合はむつかしい。藝術上の協會は之はない、藝術の如きは最も國民的のものであるから、尺八、ヴァイオリン丸切り違つたものである。畫であつても油繪と大和繪といづれも美を現はしてゐるがそれを調和する事が出来ない。多少出来てゐても只交ぜ合せたものに過ぎない。

國際的社會と云ふものは生活の或部分だけである。残らずの生活を統一する事は無論出来ないのみならず、國際的に交はると云ふ事は一方は平和を唱へてゐるが一方は一つも油斷は出来ない。互に鎬を削つてゐる。

次に國內の社會も只部分的である、殊に家族と云ふは最も内面的のものである。家族生活を解放して社會的にすると云ふ事は出来ない。只國家の統一内には家族がある。國家は家族の中にも立入る事が出来る。民法の如きは即ち家族の中に立入つてゐる。然るに家族内面の事でも國際社會で立入られてはたまつたものではない。であるから内外を通じて生活の總てと云ふものを漏らす事なく統一するものは、只國家あるのみである。國家はさう云ふ意味で總べての生活を統一する。今日は物を考へるに範圍から考へる傾があるが大きくさへあれば全體であると云ふ考へがある。之も近代的の考である。範圍が廣ければ全體であると考へる、多數が一致すれば眞理と考へる。全體と云ふは一個人の中にもある譯である。眞理と云ふ事は全體であるから百人が間違つてゐて一人が正しいと云ふ事も出来る。範圍が廣いから全體と云ふ譯でない。一つの國家は一つの國家で、國民の生活の内外を洩らさず統一すればそこに全體の生活が現れる。今日では社會的生活に入つてから大衆

と云ふ事が八釜敷くなり、民衆と云ふ事多数と云ふ事が遵奉せられる。多数のある所に真理があるとて、多数決で事をやつて行く。多数の所に真理があると云ふのは多数が力を持つといふ事でありませぬ。然し多数が力を持つたとして、多数の所に必ず真理があるとはいはれない。多数の見所正しい事もありますが、絶對的に正しいとはいはれない。それで國が大きいからといつても全體的統一とはいはれない。合衆國は日本より廣いが國家の實を擧げてゐる譯でない。合衆國の如きは完全な國家をなしてゐない。合衆國全體の統一は薄弱なものと言はねばならぬ。支那の如き國は大きいが國家全體の統一がない。小さくても十分に統一されてゐるのがそれが國家である。

昔ギリシャの如きはアテネの市テベスの市それが即ち國家であつた。全生活を完全に現はし且つ真理を完全に現はして居ると考へたのである。こゝにいふ法の組織といふものに對してそれに對する我々の感情此が敬することである、法と敬とは離れないものである。法は敬ふべきものである。先から申し上げた様に、敬はぬ所の法則は利害の約束でそれを守つた方が得である。それに背くとお互に損であるといふことになる、それは法の真相を

誤つて居る。法は元來物の理法である。即ち真理である。真理即ち我々の智慧は真理を掴まへる。智に入る道は敬である。知識慾から知識に入らない、知識を授ける人を尊敬することから入つてゆく。尊重すべき真理は我々の實行すべき法則で、國家はかゝる法の府である。國家の原理は國の法則を敬ふことである、國法を遵奉するといふことが、法の方面からいふと國家の根本になる。獨逸人は國家はエーレによつて成り立つといふ。エーレとは我々に譯すると名譽であるが、我々が名譽といふときは誤解を起す恐れがある。先づ其の面目體面と云ふと間違ひない。エーレと云ふは人々自分の體面を汚さない即ち國家に於ける法といふものを尊敬する。軍人は軍人の體面を保つ様にする、教師は教師の面目を重んじる。自重自尊といふのは畢竟個人を主張する譯でない公の組織に於て獨特の地位を占めて居るから自重自尊は國家の法を尊敬する譯である。殊に公の職にあるもの（農工商の如きは全體にして言へば國家生活に貢獻するのであるが其の仕事は直接的に國家的でない）教師軍人官吏そふ云ふ直接國家に従事するものは、獨逸人はスタートベアムチと云つて區別してエーレを尊重してゐる。自分の其の學校の教師でありましてそれ／＼名がある、

尊敬の名があつて皆區別する。日本で云ふと勅任教授といふ様な其宛名が定つて居る。それをつけないと禮儀に合はないと云ふのは自分が威張ると云ふことではない。國の授けられた名譽であるから尊敬する。我々も國家から戴いた位階勳等は之を尊敬せねばならぬ。我ものでない朝廷から下さつたものであるから大事にしなければならぬ。それ丈我身を重んじなければならぬ、自重心がなければならぬ。それで我々は其の面目を重んずる、我國では廉恥節義を重んずる。特に官吏は廉恥を重んずる伊藤公は偉い人であつた世間から非難せられることも素行の上で、然し官吏の標本として非常に伊藤公は廉潔であつた、金錢といふことに於いて卑しい事がなかつた。さういふ事は全體的に認めて居る。殊に官吏に廉恥が大切である、廉恥を失ふとそれが一般官吏の職をなす邪魔になる。瀆職罪は官吏として最も恥づべきものである、一般の法の上では人を殺すといふ重い罪はあるが、然し官吏の性質から云へば瀆職罪が官吏としての生命を失ふ。官吏として最大の罪惡と云はねばならぬ。それは官吏は特に法をとるものであつて一般が其法に従ふものであるからであります。それ故官吏自身は格別法を守らねばならぬ、其法に關係ある官吏が面目を重んず

るといふ徳義心は、特に最も大切な譯である。そこでこの廉恥を重んずると云ふことが官吏の生命である。畢竟これは敬すると云ふ事から來るので、恥ずると言ふこと、敬すると言ふ事は丁度表裏をなすものである。敬ふべからざるものは即恥づべきものである。道德の消極的形で現はせば恥を知れと言ふ、積極的に云へば敬すると言ふ。元來敬と云ふ事から知識に入つて行く。然るに教育は知識から入つて行かねばならぬから従つて子供の敬の心を教育の本とせねばならぬので子供の好奇心興味心、模倣性に訴へてはならぬ。教育の根本は知識を授ける人を尊敬するにある。家にあつては親を尊敬すると云ふことが元なのである。法の下にあるものを臣民と稱する、その臣民なるものは敬が根本である。人の臣となつては敬に止まる、それが至極のものである。此に腹をすえる。敬と言ふものは人民の止まる所である。法と言ふ方で道德を説きましたのは西洋でもカントが一番である。カントの道德は客觀的に言へば法が道德の全體で、主觀的には法を尊敬する事が總ての道德であるとする。

社會の法的組織の中に始めて人格の關係が起るのであるが人格と言ふ言葉は色々の意味

がある。心理學的に言へば我々が一つの心を持つてゐる我々の意識には統一がある、そう云ふことを人格と言ふのであらうが、それだけでは、倫理學では人格とは言へない。道德上人格と言ふのは法的組織の上に於て始めて成立する。つまり人倫の組織父子夫婦兄弟の秩序である。先生に生徒、上官に下士、資本家に對して勞働者、醫者に對し患者、あらゆるものは對立關係である。廣く言へば男子に對して女子、皆そう言ふ對立關係でないものは一つもない。我々社會生活はあらゆる對立關係を一身に集めたものと言つてよい。それを人格の關係と言ふ。自分獨の別の人格と言ふものはない。人格を尊敬しようと言ふには、そう言ふ社會の法と言ふものを尊敬しなければならぬ。如何に力のあるものでも、一個の男子を奴隸にすることは出来ない。只一個の男子なるが故でない、それは國家に於ける一員として國家で認められてゐるものであるからである。それを紊すことは出来ない。どう言ふ偉い人でも一個の女性を冒す事が出来ない。只生物として一個の女性を冒す事が出来ないのではなく、それは法を冒す事になり、許されないのである。學術の或方面は間違つた事を自然に段々除けてゆくことが仕事である、ミルは自分の仕事は間違つた澤山の事を除

けてゆくにありと言つてゐる。權利と言ふ様な思想に非常な間違がある、假に個人の權利がありとする、然るに其の權利は法によつて出来ると言ふことは知らない。先刻申上げた獨逸では、法も權利も同じ言葉である。法がなければ何の權利もない。財産があつても法で保護されて居るから權利である。でなければ馬賊が入つても仕方がない。俺には人格の權利があると云つても何にもならない。まるきり死物になつてゐる。國家組織がなければ只生物であるに過ぎないことになる。其の時に權利を主張しても何にもならない。それで尊重すべき人格と云ふは即ち社會に於て人倫の關係を正しくすることから出来るのである。人格とは個人と社會を結びつけたものである。公を忘れた人間は尊重すべき人格でない。尊敬すべき人格と云ふのは公の生活に欠ぐべからざる地位を占めて居り、公のことにしてゐるからそれで尊敬すべきである。自分の便利勝手ばかり計つてゐる者は誰しも尊敬しない、俺は人格があると言つても人が容れない。人格は人と人との關係から出来るので生れの儘に人格がある譯でない。其の總ての關係を作るものが即ち國家の統一、支那でいふ禮である。それで支那人は禮儀のあるのを華といひ、禮儀のないのを夷と言ふ。華と言ふは禮

儀のあるものである。禮儀のあるものは國家をなして居る。夷は禽獸に近いものである。只禮儀によつて人間は尊敬すべきものである、禮儀あつて始めて人であり、禮儀あつて始めて人間である。さてその法と言ふものを主觀の方からいふと、我々に人格と言ふ感じがなければ國家を維持することが出来ない。互に人格を尊敬し合ふといふことがないと、歸するところは力を持つて押へつけるといふことになる。そうすると國家は面白いものではなく、實に殺風景で油斷のならないものとなつて、互に尊敬し合ふといふことはない。さてその法といふことを段々さしつめて行きますとどうなつて行くか、理法といふは人間でこしらへたものでない。國家の法も只こしらへたものといはれない、皆學理學術により、人間の智慧により、ものゝ法則といふものを認めて、それによつて立てたものであつて、任意勝手のものでない。總ての理法といふものは、これを天に歸する。天地の理法所謂天理といふことにならねばならぬ。そう言ふ考へから支那の政治哲學では上帝と言ふことをいふ。萬物の理法を授け宇宙を法的に主宰する、それを上帝と稱する。帝と言ふことは人間から取つて來た言葉である。統一するものは共通であるから、宇宙を法によつて統一す

る、萬物に法則を與へる萬物の立法者、それを上帝といつたのである。上帝と云ふ言葉は非常に面白い。それで天子は上帝の則に従ふ、總て法とか道とかいふものは上帝の道から出て來る。智慧といふのは畢竟上帝の道を教へるのである。知識といふのは好奇心から起るものでない。天の心、神の心、上帝を敬ふ精神から起つて來なければならぬ。それで孔子も天を畏れるといふことをいつて居る。畏敬する意味である。支那には色々好い事をいつてゐるが古い言葉に物あれば則ありとある。物には必ず其の法則がある。梅があれば梅の則があり、櫻があれば櫻の則があり、人間があれば人間の則がある。則といふのはそのものゝ性といふことである、天性である。天性に背いた法則といふことはない。上帝の法則は物の天性がその則である。天性は天の附與するものである。梅といふ梅は自分から生れた譯でない、天然の働きであつて、同時に梅の性を附與せられて居る。生れ落ちると性を持つて居るといふと同じである。先に出來て後から法則が出來たものでなく一緒のものである。總べて則とか性とかいふことは上帝から出たものである。上帝と名づけるは理法といふ立場から萬物の根本を見たのである。そこで支那でいへば天性といふは上帝の則に従ふ

のである。天性は天の命で、天の命を奉じて上帝の心の通りに政治をする、こういうのである。

東洋の國家で一番立派なことが祭で、祭が政治の根本になる我國では即ち政まつりごとといふ。支那の天子は上帝を祀る祭典といふことが、國の根本になつて居る。總ての法は上帝から出るから上帝を祭るといふのは天子が上帝と一緒に居る。尊敬の誠を神に致す儀禮をしなければならぬ。自分一個の私を捨て神の意のまゝになる、自分の私心を捨て上帝の意を受ける。祭は人間が自分の私を捨てるのである。支那では上帝を祭るといふのが根本となり、上帝の祭は之を郊といふ。帝都の南即ち南郊に上帝を祭るから祭の名を郊と名づけたのである。今でも北京に行くときと南郊の方に天壇といふものがある。即ち天子が當時の文武百官を率ひて上帝を祭つたのである。西洋人が見ると何のことだか分らん。何十萬坪といふ廣いものであり、天壇の如きは妙なものである、天井も何もない、只立派な石で築き上げた大きな臺で、或形式である。其の趣意は元來天の意を受けて政を行ふといふにある。上帝は造物主である。梅を生むといふこと、梅に性を授けるといふことは同じである。生

んでから質性を授けるといふことはない、物に法則を與へるといふこと、物を生むといふことは同じである。理法でいへば上帝と名づける、萬物を生むといふ方からいへば天は萬物の親である。そこで支那では上帝といふ名もあるが、同時に萬物の父母といふ思想がある。それは即ち生むといふ方である。生むといふ方は敬に對する所の愛である。愛は生命に關係があり敬は法に關係がある。それで矢張り慈悲と智慧とは一致する。天は最上の智で萬物の理法の根源であると同時に、最上の仁で萬物を生む所の生みの親である、そこで一國の君主は法を以つて天下を治めると同時に徳を以つて天下を潤するものでなければならぬ。陸象山が私意一關を経ざれば徳に入らず徳に入らざれば法度典則何を以てこれを知らんといつた。法度典則といふは國家組織のことである我々は今日國家の組織、法律といふやうなものを解釋するには殆んど法律丈けで解釋する。法律學と言へば倫理道德に關係のない様に考へる。西洋の學問は必ずしもそうでないが我國では大學の學問がそうなつてゐる。他の點で補ふ所があるが法は法丈けのものであると専門の法學者が考へてゐる。國家の組織はこゝにいふもので法律はこゝにいふものであると知るには、道德に入らねばなら

ぬ。道德の立場から見れば國家の組織は諒解出来ないものである。徳に入るには私意一關即ち人間の私意といふ關所を越さないと道德の世界に入れないと言ふのである。道德に入らねば法度典則何を以つて知らん。知つた所が皮相的なものである、真相は得られないといふのである。それで法治といふのはそれ丈であると變則である。法丈けでは表面的である。其の根本に道德がなければならぬ。これ等の考は從來我が國では武家政治でも藤原の政治でも只法で治めるといふ考はなかつた。矢張り道德といふことがあつた。所が西洋の思想が入りまして法治の政治といふことが入り、徳といふのは別問題であつて、直接關係はないとして法則丈で國を治めるといふ考になつた。併し西洋と雖も全然そといふ譯ではない。然るに我國では却つて法治丈けでよいと思ふやうになつた。總て我國で西洋の學問を取入れたのは専門家が専門の方面丈け取入れたのである。西洋では文物は一齊に發達するもので其國の文化の諸方面は一本の木の枝葉の如くであると見て居るそこで獨立の學問は本當はない。それを倫理學は倫理學丈けで、残らず取ることはしなかつた。そこで西洋で分れて居る以上に我國では分れた、そして法律學と道德學と何の關係のない様に考へる

やうになつた。ギリシヤでは國家論が即ち道德論である。其の意味は今日まで残つて居る。イギリスなどは、主法論と道德論とを離さぬ、極く近世に至るまでそうである。道德原理と立法原理は同じと考へてゐる所がある。そといふ譯であるから今日法丈けでやつて行くといふ考へは偏つて居る。法の本が徳であるが、その徳は何であるか、廣く言へば仁・義・皆徳であります。こゝではその慈悲慈愛の事である。徳ある人のことを徳は潤すといふのはこれを指すのである。法度典則が充分行はれると國が生き／＼して居る。其の國に生命がある。法を徹底して行ふといふは即ち其の國を活すといふことになる。立法者は國を活かすものであつて、萬物を造るところの造物主の意を承ける、而して萬物に理法を與へるものである。萬物の父母は同時に上帝である。そといふ譯であるから、立法者といふものは即ち國を生す所の國の親といふことになる。そこで君といふこと、親といふことは一つといふ意味がある。天地の神即ち上帝は萬物の父母で親といふ意味がある。この法といふものはそといふ意味で、法といふものを少く共生命に結合しましてそといふ風に言つたものはソクラテスであるソクラテスはアゼンスの國法に従つて潔く刑に服したのである。

其の趣意は國あるによつて親あり親あるによつて我あり自分の父母があつて自分を育てた、其の父母はアゼンス市民である。之が我を生み我を育てたのである。アゼンスは國法があるからしてある。もし國の法がなかつたら一日たりとも立ち行くことが出来ない。アゼンスがあるのは法が行はれて居るからであつて自分はアゼンスの國法によつて今日まで生きて居る。今アゼンスの國法に照らされて死ぬるといふことは自分の命に反へるといふことである。それを國法を逃れて生き様といふことは出来ない。國の法によつて生れたものが國の法によつて死ぬるといふことは、當然なことである。そういふ意味のことを弟子にいつて居る。獄中に弟子が入つて色々都合をつけるからこの獄中を脱する様になさい、出ても差支ない様にするといつたが、其の時ソクラテスは潔く刑に服するといつたのである。それは法は生命の元、法と生命といふものを一つに見て居たからである。即ち君主は親といふ意味であるのである。それで法といふものは人を殺すこともあるが、殺すは即ち生かす所以である。法に背いたものをその儘にして居れば其の人は滅亡に向つてゆく。戒められるから反省して正に反つて来る。正に反るから生きるるといふことになる。學校で生

徒を罰するのも其の意味である。悪いことをするものを知らぬ顔しておけば益々悪い方に入つて行く、其の生徒を滅亡に導くことになるのである。法を正すといふは生きる道に引戻すのである。全く全體の生活を掻き亂すと言ふことになれば、其のものは殺さねばならぬが、それで全體が生きているのである。それで刑と言ふは生かすと言ふのが本當の趣意である。之等のことを古來支那では言つてをる。刑を以つて教を助ける。司法官は他の方面で國民を教育する。刑は即ち一種の道德教育で悪いものをよい方にする。刑とは正しくする、歪んだものを真直ぐにする。君主が法を天下に行ふは萬民を生かす意味である。秋草木の葉が落ちて春は芽が出るその秋の風も春の風も、草木を殺す風ともなれば其の風が矢張り草木を生かす譯にもなる。天に型つた支那の政治は刑罰を秋に施す。周の組織では司法官のことを秋官といつて居ります。秋官といふのは司法大臣といつてよい。刑罰は秋之を施すといふことは我邦舊藩時代にもそういふ事があつたらうと思ひます。秋首切場所に引張り出す。秋は天下萬物を殺す時である、其の時は君主といふものは謹んで膳を減ずる、美味いものを食べない、惡むのでない氣の毒だと思ふのである。そういふ譯であるから法とい

ふものは元來生かすことが趣意である。刑するといふそれはその刑に觸れたものに對して現れて來る、觸れた時にそれを殺すといふことに却つて生かす意味が顯著に現れて來る。そういふ譯であるから、昨日申上げたやうに立法者は超法者でなければならぬ。法に背いたら罰するは當然であるが、其の當然のことを痛み悲しむといふは、法をのり越えて法に束縛せられてゐないからである。法を生かすものは法以上のものがあるのであるから所謂大赦といふことも出て來るのである。如何にも犯罪を吟味して罰の輕重を誤らない様に細かい規定まで設けて吟味するが、それを恩赦とか大赦とかいつてそれを赦す。之れ等は法を定めてをき乍ら氣儘勝手に赦すのではない。元來法を設けたその立法者の大權であつて、天子でなければ出來ないことである。法の主人は法を超越してゐるので法に觸れたものを赦すといふ力も出て來る譯である。若し立法者が法に縛られるなれば其の働きがつかないで、大赦恩赦といふものはある筈はないのであるが、そういふ所に法といふものは生きて居る。只機械的のものでないといふ事が見へて居る、機械の運轉なれば機械の構造で機能通りに動く、それを超越することは出來ない。汽車でも蒸氣機關の通りに動いてゐる。法

律機關が其の通りならば死物である。立法者は法の上のもので任意勝手ではない。自然に敬愛の根源から、慈悲と智慧との泉から、そういふ働きが出てくる。そういふ譯であるから法といふ立場から君は嚴なるものである。法といふものは生かすものであるから其の點からいへば君は仁君、政治は仁政でなければならぬ。國法の下にあつては國法を敬する。表からいへば君は嚴君でなければならぬ。法を嚴にするのは畢竟國民を生かすのである。人の君となつては仁に止る。經濟財政といふことも皆そうである。道德が經濟の基である、之等のことも本末を顛倒すると經濟が本でそれから道德が起ると考へるやうになる。それではなくして根底に道德がなければ經濟が起らない。熊澤蕃山の經濟論は富有大業、日本全體のことを考へる。富有大業は何處から起るか仁政のことである。民に對する親愛の心から起らなくてはならぬ。其の精神がないと經濟が本當の經濟にならない。自分／＼の都合の好い様にする、そこで國君は民の父母なりといふ言葉も起つて來る。國民は天子の赤子親子の關係になつて來る。天地は萬物の父母その萬物の中で聰明なるものは人間である。人間の中で聰明なるものは天子とする。その天子が民の父母である。これは支那の古い思

想であるが、天の意を受けて民の父母となるものが君である。そういふ譯であるから君といふは全く國民の親といふ立場となるのである。智慧の方から見れば法を天下に施す。慈悲からいへば萬民を生ず。西洋でキリスト教でもキングダム、天の王國といふ事をいふ。天國の王様は誰であるか神である。神は君主である。一方では神は天にまします父といふ。上帝と天父とは同じものである。生命の元といふ方から之を天の父といふ。即ち萬物の主、法則の元から見れば之を上帝といふ。乃ち君父一といふことになる。それを分けると親子は生命の道を現す。生命は無窮といはねばならぬ。若し絶滅した時は生命でない。生命である場合無窮のものをこの世の中に現すは親子以外にない。親から子、子から孫限りない生命の無窮なるものである。生命の無窮の道を此の世の中に現すは親子である。そこで親子の間程親しみの深いものはない。慈愛といふは親の徳であるが、所謂父子親ありである。愛といふことが随分いはれる。そして男女の愛情といふことが愛情の最上といふ様に考へるかも知れぬ。然し男女の愛が愛情の根本でないそういふものは随分憎惡に轉ずることがある。つまりそういふ事から殺したり斬つたりといふことが起る。親子の愛情はそういふ

ことになる氣遣はない。我子が悪ければ悪い程一應は憎いが心底は矢張り可愛い。男女の間では自分の思ひのまゝにならないなら憎む様になる。愛情の根本は勿論親子である。生命の續きである。そうして又親子の中に矢張り君臣の關係がある。此の世の中に法を立てるものは即ち君である。そこで此方からいへば君臣義である。教の出發點は幼少の時にありて幼少な子供が父母を敬愛する事が教の出發點で道德の本である。敬愛の中に君臣父子の道がこもつて居る。親の命令は人間が始めて出合ふ法則である。法則は生れる以前にある。男女が精を構へて子孫が繁殖する之は法則である。法則ならざるものはないが本能的に従つてゐる。それが法則といふ形で現れるのは、只父母の命である、信賴尊敬が起らねば法則とならない。そこで人間が始めて智慧の生活に入る譯である。父母の命は始めて法則である。家の立法者には父母である。親の事を家人が嚴君ありといふ。親は家の嚴君である。敬愛の方で敬に重きをおけば親は君である。愛に重きをおけば親である。父子の道に君臣がこもつてゐる。だから親子の間に道德一切が具はる。孝といふものが萬徳の本であるといふのも、そういふ點からいふのである。母を通して神を知るといふのも其のこと

である。天地は民の父母である。人君は一國の慈母であり嚴父であるといつてよい。國に親があり家に君がある。其の表面をいへば家に親があり國に君がある、感情の方からいへば愛情慈悲、親子。智慧の方からいへば正義、君臣。此の二つのものが何時も離れない。さて其父母の家の法は何處から來たのであるか、親が子を育てるのは何を根柢としてゐるか、親がよいとして考へることを教へるのであるか。それは絶對的親が考へ出したのでない、畢竟家の法といふも、人の親が子を育てる教へるといふも、皆國から來たものである。一個人の發明でない。學校の教師が教へを施すのも國の教法から來たもので、教師の發明發見でないのであつて、國の法があり、世の中の教といふものが流布してゐる。歴史の發達の中にさういふものが出てゐる。それによつて教科書にしましても矢張り國の教へといふものを傳へてゐる。一家にあつても、親が子を教へるに就いて勿論自分の考を通じてであるが、其の根柢は國の風といふものを移すので一家の風は一國の風を反映するに相違ない。イギリスの家庭はイギリスの國風を移す、日本の家庭は日本の國風を移す、教のものは即ち國にある。故に國の法が家の法のもととなつてゐる、之以上のものは決してないので

ある。我々は外國から教を受けて國家を造つた譯ではない、外國人に教へられて教へが出來た譯でない。文化の交通することは他と交通する自分の文化を持たねば交換することは出來ない。野蠻人の真中に文明人が入つても教化のしやうがない。自分の文明がなければ西洋の文明を理解することが出來ない、耶蘇教の眞理を日本人が理解するも我文明の力である。今日は直接西洋に行つたり西洋人について話をしたりすることがあるが、其れは見眞似口眞似で西洋の言葉を習ふ。我々が初めて英語を習ふたのは何で習つたか我々の漢學の力で習つたのである。漢學の力で英語を習つたといふと妙に聞えるが事實さうである。始めて日本人の習つた外國語はオランダ語である。オランダ語學を學んだものは醫學者である。舊の言葉の入れ方といふものは單語／＼と記して、それを結合したものである。こちらの學問のないものは外國語を習ふ事は出來ない。今では只子供が親から言葉を習ふ様に眞似て耳から入り口に發する。さういふ方法で習ふが、初めて西洋文明に接する時には夫れが出來ない。學問のあるものでなければ外國の言葉を入れることが出來ない、今日でも或程度までさうである。絶對的に口眞似で入つたものではない、吾々漢學と言ふが日本

の學問に依つてそれで英語が這入つたものである。吾々が文明を持つて居るから西洋文明が諒解出来る。それからキリスト教を聞いて信仰を持つのも矢張り文明人であるからである。畢竟その文化と言ふは國民の産物が本である。五十年六十年に西洋の文明が水の流れるこむ様に入つて居る。水も岩を通じて這入ることは出来ない、文明は只流れこむ譯に行かない、こちらが取入れねば這入らない。畢竟國の教、國の法は國から出たものでそれを代表して居るものが即ち一國の主宰者である。個人的に言へば君主であつて、實際を言へば民族の精神を代表したものが具體的に表れたものである。民族精神の化身と言つてもよい、一國の教を除いてしまつてそこに教師の教へも親の教へもない。そこで殊に人の親たるものが幼少のものに對するにも又教師が兒童等を對手にするにも個人的の考へは捨てねばならぬ。高等専門學校の教師は研究も自分の研究で自分一個の意見で發表することも出来る、學術界に訴へる事が出来る。そういふものは民衆に訴へるものでない、勿論子供なかに訴ふるものでない、大學の自由といふことを獨逸人が唱へて居るが、大學の自由とは國事のことでも、政治のことでも、皆學者仲間に發表する事が出来るといふ意味で、民衆

に發表することは條件つきである。知識慾なら何でも取入れるとなると丁度食慾は食べてはならないものを喰べると同様であるそれでそれを指導せねばならぬ。兒童を對手にする教師は新らしい事で一般の認めないものは尤も避けねばならぬ。一般に認められた國の教によつて行かねばならぬ。まだ研究中である所の判らないことは之を避けて一般の文化の寶となつて居る動かすべからざるものを教へて行かねばならぬ。教育上の説であつても一般に認められた道をたどつて行かねばならぬ。研究のものは批評的學理から發表してもよいが、子供を教へるには一般的確かな所に依つてやつて行かねばならぬ。新らしがりといふ事は禁物である。自分の研究するのはよいが、子供は研究や學理ではゆかない。父母の法は本と國の法から來て居る。身が修まつて家が整ひ、家整ふて國治まる天下泰平とあるが、之は人々のいましめの言葉である。その根本はさういふ順序でない。國治り天下平かなる中に家整ひ身も修まる。國治り天下平かといふは國家が組織せられてゐる世の中の教へが流布して居る。法といふものが立つて居るのである。であればこそ個人／＼が修身といふ事が出来る。今日修養といへば國の文化に依つて身を修めねばならぬ。吾々が發明す

るのでない。道德とは家族の隅から發達しない、個人が先づやつて行きそれから家が實行する、それが廣まつて行くさういふものではない。全體として發達するのである。總べて生きたものの發達するは皆全體からである。煉瓦を築いて行くは一個づつ築いて行く、生物の發達は全體的に發達する。細胞組織を解剖して見れば、煉瓦を積んだ様なものであるかも知れないが、人々の細胞を積み重ねて體は出來て居ない。元の一の細胞が分れて一齊に發達する。心臓だけ出來上つてから肺臓、さういふものではない。未生の時には皆未生、出來上る時は皆出來上る。一齊に發達するので全體的に發達するのである。出來上つた所の國家の中に生れた個人／＼が身を修めねならぬ。修身は國の全體の教を豫想して居るのである。國の組織と道德の實現が同じと言ふのは、その事である。道德は個人個人片端からやつて行くものでない。個人がやるに就ては周圍にそれを豫想せねばならぬ。全體的に發達せねばならぬそこで一個人から言へば成る程身を修めるのであるが、他の方から言へば國の教に依つて行くのである。此の事をギリシヤの哲學者は國家に於てのみ人間は道德的になり得る、國家以外に於て人間は禽獸に近い、國家が人間を道德化すると言つてをる

然し之は先づ國家が出來て個人といふ譯でない、全體といふものは一齋のもので循環してゐるものであるから、勿論一個人が修養勉強する、又自分／＼の家を整へる、さういふ事で國の全體の道德が盛んになる。國から個人、個人から國と循環して居り全體的に發達してゐる。そこで道德は其の個々の徳目から發達しない、先づ父子の親愛それから夫婦の道といふやうな事はない。人文は皆一齊に發達する。丁度我々の體が心臓肺臓等皆一齊に發達すると同様である。一方が幼稚なれば他方も幼稚である、多少の不均一は免れないとしても大體全體が發達する。そこで徳目をいへば、一つの徳目は他の徳目と連絡して居る。一つの義務の中に萬の義務がこもる國に孝子あれば忠僕貞婦もある。一の風紀を見れば其國の一般の風を察する事が出来る。一方の道德が紊れてゐるといふは他の方面の道德も大概紊れて居るといふ事になる。それで西洋の或學者は孤立した義務の命令がないといつてをる。只嘘を言つてはならない斯う言ふ義務の命令で孤立したものでない。道德全體と言ふものと連關して考へないとそれ丈切離して絶對的命令にはならない。何でもある事は言はなくてはならぬ、かくしてはいけなと言ふ風にすると道德が死物になる。かくさなく

てはならない時もある。道德全體からそう言ふ働も出て来る。嘘を言つても嘘でないと言ふ事もあり得る譯である。其の人の境遇、道德全體の關係の上から死なねばならぬ事もあらうが、それを總ての人の標本にする事も出来ない、總べてそう言ふ事は場合に依つて起つて来る。そう言ふものは型にはまつた法と言ふものはないのであるが、精神は變りがない譯である。そう言ふ譯で全體の中に部分がこもつて居る、總ての徳目は何か統一點を持たなくてはならない。道德生活は有機的のものである。それが即ち我々の國家生活である。之が道德の一般の理であらうと思ふ。この理に對して、事といふものは應用せられたものである。哲學は一般の理のもので實際の事は歴史のものである。學問では物の一般の道理を究めねばならぬと同時に、歴史上の事實と言ふものを調べねばならぬ。人間の心は一般に同じものであると言つても矢張り民族により、個人に依り特色を持つ。特色を持つたからと言つて道理に違ひはなからうと思ふ。況んやその働きは千差萬別があるのである。學問は昔は道理と事實即ち經學と史學を重んじた即ち學は經史に通ずべしとした。今日は一般道理を説くと言ふ方が好かれて居る。一般道理も民族によつてその働らき方に特色があ

る。特色を離れた働らき方はあり得ない。道理を説く哲學そのものが國民の特色を持つ。日本の歴史と言ふものを知らないといふ一般の道理で物を推すと言ふ事になる。其の國家學が西洋の國家學であると、その道理を持つて日本にあてはめるが其の通りにゆかぬことがある。道理に違ひないが實際に現はれる時にはそれ／＼の事情がある。民族の生れつき生立がある、特色がある。型を持つ、それでないと生きたものにならない。それで中等教育普通教育に於ては最も歴史と言ふものに重きをおかねばならぬ。教科目としては歴史をやつて居るが他の學科に最も多くの時間を費してゐる。それに比べると自分の民族の歴史と言ふものにそんなに骨を折つて居らない。詳はしく知らないで概括したものであると味はれない、それでは不十分である。成るべく詳しく知らねばならぬ、それで今國家の組織といふ風な事を説きましたが。親子の道を出發點としてそれから道德もこゝに基礎をもつてゐる。然し今まで私が話したことはないはゞ書に書いたやうなもので、さてどういふ風にして此の國家が出来るかといへば全く問題が違ふ。國家成立には成立の根據に立たねばならぬ。國家といふものは斯ういふものであり道德は斯ういふものである、教は斯ういふものであ

ると、斯う申上げることには何か多少力ありといふのは、暗々の裡に我が國の存立を豫想してゐるからである。それを豫想しなければ斯ういふ議論を吐いた所が所謂、畫餅、ユートピアを描いたものに過ぎない。之が實際になるのは立法者が何處から出るものであらうか、徳と法を合一した君主は何處から出て来るのであらうか、その足元に氣をつけねばならぬ。成程政治の根本に慈悲がなければならぬ道理であるが、實現するには何處からそれを引張り出すかといふことになる。道理から事實は生まれてをらない、事實の中に道理がこもつてゐる、その道理を闡明にするのが學問に過ぎないのである。國家存立の道理を述べ道徳を述べる前に何が本であるかを述べなければならぬ。人間に衣食の慾があり、財寶の慾があり又名譽慾權力慾がある、又親子男女民族人類色々の感情がある。そういふものであるがさて是等の生活を統一する中心點が何處にあるか、そうすると民族であるところといふことになる、それは偏した考であると、こう考へるかも知れないが事實はそうである、事實の上に道理がついて来る、此を哲學倫理學が忘れてゐる。總て倫理は實際に立ち歸へつて見ると民族が中心となつてゐる。元來人は生物であり、生きてゐるものは皆種を本として

ゐる。先づ個人があるに就ては種がある。日本人は日本の種から生れる。民族といふものは今日ある通り始めからあつたものではない、民族も出來たものであるが、それは矢張り似よつた種族が結合したのである。白と黒とを合せることによつて出來るものではない。天然自然のものである。總てのものは其の根本は天然自然のもので人間の力で塵一本拵へようといつて拵へられない。米一粒作らうといつて作られない。人間自身が作られたものであるから、内界外界人間が勝手に作ることは出來ない、吾々の感覺でも起つてから普通に氣付くものである。念の起りは人間は普通知らない、耳に入つてから氣がつくのである、まだ感覺のない時ある時の絶對的境は知らない。ゴロ／＼と音がする、音のまだない時その初を擱へることは出來ない。又外界に於ては一物だに作ることは出來ない。只與へられたものに人間が色々細工を施す、分解結合といふ事をやる。其の分解の仕方結合の仕方は人間の創造で人間は第二の造物主といつてよい。與へられたものによつて、人間らしい拵へ事をやる、それが間違ふと私慾といふことになる。それで我々はそういふ天の種といふものから生れてゐるのであるから、人間が社會をなすと言つても先づ個人が別々に居て、

それが相談をして集つたといふ如きことではない。同じ種から生れるものが自然に群をなしてゐる。其の始めは知ることは出来ない。社會と言ふ言葉はそれで色々誤解を起す、民族といはねばならぬ。社會に精神はない、民族には魂がある。人の寄り集つてゐる所に精神は出来ない、營利會社といふに魂はない、消費組合に生きた魂はない、それは矢張り民族でなければならぬ。民族の精神といふ事はいはれるが、さういふ天然自然の民族的群居、種族的群居が本で、社會を法的に組織すると言ふその社會は、元來民族である。民族があれば魂がある、であるから社會の法的組織の中にも特色である。法的に組織するにより皆特色ある精神を現はす。一個人がそれ／＼違ひがある様に民族國民に違がある。國體の相違とか、政體の相違とか言ふものがそれから起る。まるつきり同じ國體をもつてゐるものは萬國にない、政體でもさうである、フランスは共和國であるがフランスとアメリカとは違つてゐる。イギリスも立憲政治であるが我國とは違つてゐる、一國あれば一色、十國あれば十色がある、それで生きてゐる、面白いものである。我國の特色は何であるかといふと、支那の言葉を借りると、上帝先王が一つである。支那は上帝を祭り上帝の則に従つて

國を治めねばならぬ。國は法の集りである、其の法の淵源は上帝である、だから天子は上帝の精神を受ける、然るに國を立てたものは先王である、そこで國家は先王の法に従はねばならない。先王が國を立てるに就いては根本たる上帝に従はねばならぬ。後の天子たるものは一方は先王の法に従はねばならぬ。同時に先王の法は上帝の法でなくてはならぬ。先王の法に従ふには先王を祭り建國の精神を受け繼ぐのであります。建國の精神を受けつぐといふ事の形式に現はれてゐるのが祭である。先王を祭ると同時に上帝を祀ると二つの祭がある。それを一つにする様に上帝を祭る時と同時に先王を祭る。先王を配する上帝を祭る時は上帝が元であるが、先王をお相伴に祭るのであります。それによつて上帝と先王を分けないやうにする。周の天子は周の建國の精神に従つて行くのである。其の根本は元來上帝の道である。ところが國が變ると周が衰へて秦となり、秦が漢となる様に先王は代るのである、そこで上帝を先王と結びつけやうとすると人爲的になる、支那ではさうなつてをるのであります。西洋で神の法といふのが支那の上帝の道といふに當る、キリスト教では地上で此上帝の道を代表するものは教會であるとする。法王は上帝の道を現はす、皇

帝は地上の政治を現はす、二元になる。法王は精神界の王様であり、皇帝は政治界の王様である。これが舊教の立て方である。キリスト教の新教の方は國家の力を借りて其教を扶植した或國家は又宗教の力を借りて國家を建てた所がある。宗教は國家と餘程接したのであります。然るに上帝の道は教會が現はす、國の法と言ふは宗教道德と離れて只法治によるとする、すると國家は民衆を集めて多數決で行く風に墮落するのである。既にギリシヤ人に、そうゆう思潮が現はれた。即ちプラトンの國家論には、後世に現はれたいろ／＼の國家思想が載せてある。即ち民衆政治も金權政治のことも言つてをる。かくなると道德と國家が別れる。我國にあつては支那の所謂上帝は國土を生み草木を生み民を生んだところの神で、それが即ち皇室の祖先である。神と先王とが一つである。神が即ち先王であるから先王を祭り天子が自分の祖先を祭る。祖先を祭るのは祖先を承けて政治をする、建國の精神によつて政治をする、祖先とは即ち國土の創造の神である。天を祭るといふことが祖先を祭ること、先王が即ち神である。それで我國では祭政が全く一致する。國の祖先は國土民人の祖先である。我國の祖先の道とは何であるか、國民を生かすといふことであ

る、國民の富を扶殖するといふことである、國民を生かすといふは何であるか、日本人は米を食つてゐる、其の米の稻といふものは先祖から傳はつたものである。富民協會のメダルの中に瓊々杵尊が稻の穂を持つてゐる形がつくつてある。之は天照大神が天孫の此國土にお降りになるとき、御授けになつたものである。國民の衣食の元である。始めて日本の國土にお降りになり、其の第一のものは稻の穂を御持ちになつた。則ち國體の精神が國民を生かすといふことにある。即ち慈悲、國民に生命を與へるといふ事である。天壤無窮の神勅といふは、今日の言葉でいへば忠孝、一つは君臣の道が規定してある一つは親子の道がこれに現れてゐる。親子の道と君臣の道が忠孝の教であります。それで物質的にいへば、其の國民の衣食の道といふ。之が國體の精神、精神的にいへば道德の教で忠孝が根本、それが我國建國の精神、其の精神によつて努力せられたものが日本の歴史。國を肇むることが宏遠に徳を樹つること深厚なり。どういふことであるか、それは我國の歴史といふものを調べねばならぬ。中世といふと天智天皇以前でそれから日本の國が盛になつたのであります。總て一家でも小さい時に祖先が努力したといふことが、基礎になつてゐる。たとへ

ば富といふことであつても、祖先が小さい時から極く僅かながら非常に勤勉して、そして僅かながら財を作つた。かういふことが後に大なる富を作ることになる。一身の上で富をなしたものでも矢張りその始めに何にもないが、骨を折つてそして少しの金を作つたのが本で、それから後にずん／＼と非常な勢で殖へてゆく。始めに非常に苦心して財寶を作つたのが本である。少年青年の時に勤勉する然しそれは知れたものである。それで學者に成れるわけではないけれども、青年の時に努力したと言ふことが、之が將來大成のものとなるのである。であるから少年青年の時に勉強しなければならぬ。一つの思想であつても、始めに充分考へる、骨を折つて考へたことは骨を折つただけの効果がある。それからずん／＼よい考が起る。始めから良い思付きが出るものではない。起る時は非常に難儀する、よく生みの悩みといふことがあるが、思想でも始めは難儀しなければならぬ。宋の范文正公は二十才前後の時に山寺に入つて、五年の間苦學したといふことがある。非常に難儀して毎日一腕の粥と一握の蕪で勉強したといふことだが、其の全體を考へるに五年間努力したといふことが將來大成の基になつてゐる。五年間どれだけの事をしたか知れたものであ

る。一國でもそうである我國の歴史も國の初めは今日のやうに宏大なものではなく、小さなものであつたに相違ない。其の時に皇室が努力せられた。天皇御自身で戦の上にも政治の上にも苦勞せられた。或は民族の精神を建設する祭といふものも、之は崇神天皇と申して、神武天皇以後では我國を立派にせられた天皇が、始めて我國に祭の法典といふものを設けられた。それで段々應神天皇仁徳天皇等此の間にすぐれた立派な天皇が出られまして、色々我國土、民族の爲め骨を折られてゐる。如何にも皇室といふものが今日の如く盛であるといふのも由來が遠い。今日大きな富をなしてゐる家は其祖先の微々たる時に骨を折つたお蔭といふ様子が見える。青年の時に勉強したことが將來の大成の根本となつてゐると同様である。國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚、同胞民族が皇室の努力のお蔭によつて今日樂に過す。歴史の事實を調べて見ても感ずることが出来る。それで父祖の精神に返るのが祭である。宮廷の主なることは祭といつてよい。天皇のなされる主なることは祭である。祭には大中小とあるが、殊に大嘗祭は御一代に御一度なされる。即ち御即位禮についで行はせられる。近くは大正天皇の御時と今上陛下の御時と二度行はせられた。そ

れが祭の代表である。政事の根本である。天皇の新に位におつきになる時の祭である。それが即ち皇祖皇宗の御精神に立戻られる意味である。所謂神の精神といふものをうけられるのである。それが現神である。祭によるといふは祭によつて神と一體になれる。それであるから米をもつて天神にお祭りになるのが、大嘗祭の中心である。大嘗祭は秋の祭である。其年に出来た米が國民の衣食、日本人の生命の本である。其の生命の本は即ち天照大神に基いてゐる。之が政治の根本である。其の米を天祖にお供へになつて、同時に天皇も聞き召すといふのは、萬民と共に其米をおあがりになるのであるからして、祭といふものが即ち政治の極く根本になる。明治天皇の御歌にはさういふ祖宗の精神によつて、政治をするといふお歌が澤山ある。神代からの教によつて、日本の國を治めると仰せられてをる。天皇御一人のお考でないといふのは、我國の天皇である。祖宗の御精神通り政治をなされる。個人的自我をお持ちにならない。私といふものはない。全く建國の精神なのであります。米を以て國の民を生かし、忠孝の道を以て教へる、天子は一方では教のもとで、徳の儀表である。今日では立憲政治といふが背後に天皇の御徳があるから、天皇は政策を

お用ひになるとか、権力を用ひられるとかいふことはない。只人間を慈しむ御仁徳、それが我國立憲政治の背後にある。だから立憲政治も他の國と違ふのである。そこで政治といふものは教と分れない。國の建て方は忠孝の教にあるのである。國民を生かす天祖の教政、教の出發點と道徳が同じである。赤子が親を信賴敬愛して其の言ふ通りになる。天皇は天祖を敬愛信賴して天祖のまゝに祖宗の御精神通り御政治をなさる。一個的利害をお捨てになる。我々臣民も個人の利害をすてたゞ天皇の勅のまゝに従ふ。それで只建國の精神のみが日本全體を支配する。其の建國精神は國民全體が生きて發展してゆき、忠孝を行ひつゝ永遠に國を維持することになる。之が我國の建方であらうと思ひます。(完)

昭和六年一月二十五日印刷
昭和六年一月三十日發行

實費金四拾錢

編者 山口縣教育會

發行者 山口縣吉敷郡小鯖村 坪井 采

印刷人 山口市新橋町 品川 幸一

印刷所 山口市新橋町 大内印刷所

終

